

# 東姥神B遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会

ひがし うば がみ

# 東姥神B遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985・3

山梨県北巨摩郡大泉村教育委員会

## 序

県営圃場整備事業に伴って、昭和54年度以降毎年実施されてきた埋蔵文化財の発掘調査事業は、それまで顧みることの少なかった大泉村の歴史に対して、村内ばかりではなく、県内いや全国の多くの方々の注目を引くに足る発見の連続がありました。中でも寺所遺跡、城下遺跡、金牛遺跡、天神遺跡の発見は、まさに歴史の一頁を塗りかえ、あるいは白紙を埋めるものであるとの感を強く受けました。特に金生遺跡の調査によって得られた資料は、大泉村の歴史としてのみ捉えることはもはや十分ではなく、日本を含む全世界の中での歴史的位置づけ、歴史的評価を受ける要素を多分に有していると言っても過言ではないと思われます。

本年度実施された東姥神B遺跡の調査では、平安時代の坏の底部に書かれた「安曇」の墨書き文字が検出され、改めて全国的な視野で本村をみつめる姿勢の必要性を痛感した次第です。その調査報告書がここに上梓される運びとなりました。本書が、本村の住民の方々にひろく活用されることを強く望みます。また歴史学の参考に供していただければ幸いと思います。尚、内容に関しては、今後先学諸氏の御叱正ならびに御教示を賜りたく御願い申し上げます。

最後に地権者の皆さん、岐北土地改良事務所、大泉村土地改良区の方々の御理解、御協力に対して厚く御礼を申し上げます。また調査に参加して下さった地元の皆さんには心から感謝の意を表すものであります。

昭和60年3月

大泉村教育委員会

教育長 浅川義彦

## 例　　言

- 1 本書は、昭和59年度県営圃場整備事業に伴う東姥神B遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、岐北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
- 3 遺跡所在地 山梨県北巨摩郡大泉村西井出字東姥神
- 4 調査面積 6120m<sup>2</sup>
- 5 調査期間 昭和59年5月1日～7月10日
- 6 調査事務局 大泉村教育委員会  
三井甲子雄（前教育長 昭和59年9月30日退任）・浅川義彦（教育長 昭和59年10月1日就任）・山田初男（係長）・浅川正人・三井初枝・三井三枝子・櫛原功一（埋蔵文化財担当・発掘調査員）
- 7 発掘調査参加者（敬称略）  
相吉よしえ・浅川英三・浅川成二・浅川たつ子・浅川久代・浅川満江・浅川洋子・河西真知子・五味ます子・平井仁志・細田絹代・細田みぎわ・三井種子・山田晶子・山田金子・山田きくじ・山田節子・山田とし子・山田豊子
- 8 遺物の整理及び本書の執筆、編集は櫛原が行った。
- 9 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御教示を賜わった。記して感謝の意を表したい。（敬称略）  
雨宮正樹・磯貝正義・岡本範之・小野正文・坂本美夫・佐野勝広・進藤一弘・信藤祐仁・木木健・鈴木治彦・新津健・萩原三雄・平川南・服部敬史・山下孝司
- 10 本調査の出土品、諸記録は、大泉村教育委員会が保管している。
- 11 本調査にあたり、岐北土地改良事務所、大泉村土地改良区、地権者の皆様に御指導、御協力をいただいた。衷心より謝意を表したい。

## 凡　　例

- 1 突穴住居址・擲立柱建物址（SB-）、土壙（SK-）、溝状遺構（SD-）の縮尺は微細図を除き全て1/60に統一してある。
- 2 遺物は1/3、1/4であるが、特に平安時代の土器、陶器類は1/4に統一してある。
- 3 本書用地図は、国土地理院発行の1/25000 谷戸、山梨県発行の県営圃場整備事業計画図1/1000である。また古絵図は、大泉村村誌編纂室提供の「西井出村」図の部分である。
- 4 遺構実測図の方位は全て磁北に合わせている。

## 目 次

### 序

#### 例言・凡例

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| I 調査によるまでの経過.....               | 2  |
| II 遺跡の位置と歴史的経緯.....             | 2  |
| 1 遺跡の位置.....                    | 2  |
| 2 遺跡の歴史的経緯.....                 | 2  |
| III 調査の方法と経過.....               | 3  |
| 1 調査方法.....                     | 3  |
| 2 調査経過.....                     | 3  |
| IV 編序.....                      | 5  |
| V 遺構と遺物.....                    | 7  |
| 1 壓穴住居址 (SB01~10) とその遺物.....    | 7  |
| 2 抱立柱建物址 (SB11~SB20) とその遺物..... | 22 |
| 3 土壙 (SK01~SK66) とその遺物.....     | 29 |
| 4 溝状遺構 (SD01, SD02) .....       | 46 |
| 5 遺構外遺物.....                    | 47 |
| VIまとめ.....                      | 51 |
| ○引用、参考文献.....                   | 52 |

### 図 版

## 表 目 次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 第1表 中岡銭一覧表.....        | 52 |
| 第2表 平安時代、中世の七器観察表..... | 53 |

## 挿 図 目 次

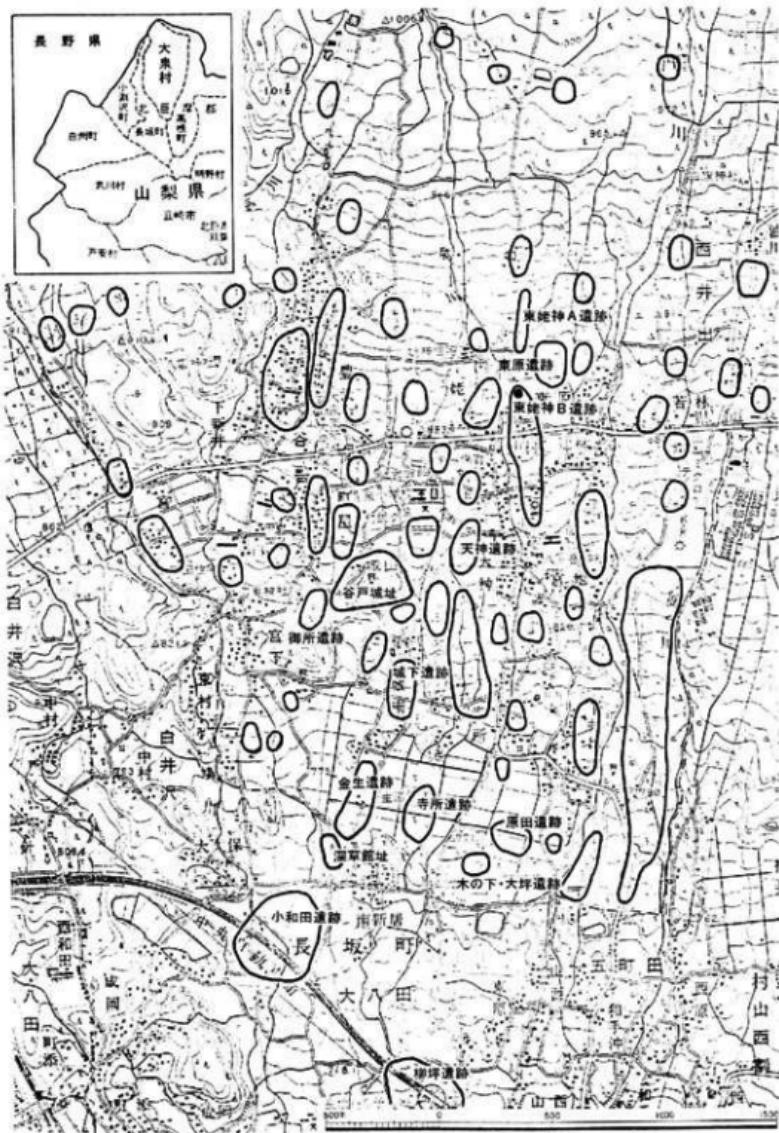
|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図 (1/2500) ..... | 1  |
| 第2図 天保9年古絵図 (原寸、部分) .....         | 2  |
| 第3図 古絵図 (原寸、部分) .....             | 2  |
| 第4図 免振区域とその周辺 (1/2000) .....      | 4  |
| 第5図 遺跡の層序 (1/80) .....            | 5  |
| 第6図 遺構分布図 (1/450).....            | 6  |
| 第7図 SB01 (1/60) .....             | 8  |
| 第8図 SB01 遺物出土状況 (1/60) .....      | 9  |
| 第9図 SB01 出土遺物 (1/4) .....         | 9  |
| 第10図 SB02 (1/60) .....            | 10 |
| 第11図 SB02 炉 (1/30) .....          | 10 |

|      |  |    |
|------|--|----|
| 第12図 | SB02 炉石転用石棒（1／4）                         | 10 |
| 第13図 | SB02 磨石（1／3）                             | 11 |
| 第14図 | SB03（1／60）                               | 11 |
| 第15図 | SB03 出土遺物（1／4）                           | 12 |
| 第16図 | SB04（1／60）                               | 12 |
| 第17図 | SB04 出土遺物                                | 13 |
| 第18図 | SB04 カマド付近遺物出土状況（1／20）                   | 13 |
| 第19図 | SB05, SB17, SK05, SK07, SK10, SK11（1／60） | 15 |
| 第20図 | SB05 出土遺物（1／4）                           | 16 |
| 第21図 | SB06, SB07, SK28, SK29（1／60）             | 17 |
| 第22図 | SB06 出土遺物（1／4）                           | 18 |
| 第23図 | SB07 出土遺物（1／4）                           | 18 |
| 第24図 | SB08（1／60）                               | 19 |
| 第25図 | SB09, SK33, SK36（1／60）                   | 19 |
| 第26図 | SB09 出土遺物                                | 20 |
| 第27図 | SB10, SK63, SK64（1／60）                   | 21 |
| 第28図 | SB10 出土遺物（1／4）                           | 22 |
| 第29図 | SB11, SB12, SB20, SK41（1／60）             | 23 |
| 第30図 | SB13, SB14（1／60）                         | 24 |
| 第31図 | SB15, SK49, SK53（1／60）                   | 25 |
| 第32図 | SB16, SK25, SK26, SK27, SK31, SK32（1／60） | 26 |
| 第33図 | SB18, SK20（1／60）                         | 27 |
| 第34図 | SB19, SK44, SK50（1／60）                   | 28 |
| 第35図 | SB19 土師質土器（1／4）                          | 28 |
| 第36図 | 土壤出土 繩文土器（1／3）                           | 39 |
| 第37図 | 土壤出土 平安～中世の遺物（1／4）                       | 39 |
| 第38図 | 土壤出土 石臼（1／4）                             | 40 |
| 第39図 | 遺構及び遺構外出土 中国鏡（1／1）                       | 41 |
| 第40図 | 土壤（1／60）                                 | 42 |
| 第41図 | 土壤（1／60）                                 | 43 |
| 第42図 | 土壤（1／60）                                 | 44 |
| 第43図 | 土壤（1／60）                                 | 45 |
| 第44図 | SD01（1／60）                               | 46 |
| 第45図 | SD02, SK54, SK55（1／60）                   | 47 |
| 第46図 | 遺構外出土 繩文土器（1／3）                          | 48 |
| 第47図 | 遺構外出土 繩文土器（1／4）                          | 49 |
| 第48図 | 遺構外出土 平安時代の土師器（1／4）                      | 49 |

|  |    |
|--|----|
| 第49図 造構外出土 土師質土器、内耳上器、陶器(1/4) .....    | 49 |
| 第50図 造構外出土 石器(1, 2は1/1, 3~5は1/2) ..... | 50 |

## 図 版 目 次

|      |  |  |
|------|--|--|
| 図版1  | 1 SB01(南から)<br>3 SB01鉄津出土状況<br>5 SB03, SB08(西から)<br>7 SB04(西から)                | 2 SB01遺物出土状況(東から)<br>4 SB02(南から)<br>6 SB03カマド<br>8 SB04カマド付近遺物出土状況                   |
| 図版2  | 1 SB05(西から)<br>3 SB06(北から)<br>5 SB09(西から)<br>7 SB10(西から)                       | 2 SB06, SB07(西から)<br>4 SB07(北から)<br>6 SB09遺物出土状況(東から)<br>8 SB11, SB12, SB20(南から)     |
| 図版3  | 1 SB13, SB14(北から)<br>3 SB16(北から)<br>5 SB18(南から)<br>7 SK02(北から)                 | 2 SB15(南から)<br>4 SB17(南から)<br>6 SB19(南から)<br>8 SK02確認面(南から)                          |
| 図版4  | 1 SK03閉塞石の出土状態(南から)<br>3 SK06(南から)<br>5 SK07遺物出土状況(北から)<br>7 SK08集石半截状況(南から)   | 2 SK03, SK13(南から)<br>4 SK07(南から)<br>6 SK08集石上面(南から)<br>8 SK08(南から)                   |
| 図版5  | 1 SK10, SK11発掘途中(西から)<br>3 SK13, 配石状況(南から)<br>5 SK16(北から)<br>7 SK37石臼出土状況(西から) | 2 SK10, SK11(南から)<br>4 SK13中國銭出土状況(西から)<br>6 SK24(南から)<br>8 SK38配石状況(南から)            |
| 図版6  | 1 SK45, SK46, SK47(東から)<br>3 SK56(東から)<br>5 SK63人骨出土状況(西から)<br>7 SK63中國銭出土状況   | 2 SK54, SK55, SD02(南から)<br>4 SK63人骨上部配石状況(西から)<br>6 SK63頭骨<br>8 SK65頸骨, 中國銭出土状況(西から) |
| 図版7  | SB01出土遺物   |  |
| 図版8  | SB04, SB05出土遺物   |  |
| 図版9  | SB07, SB09, SB10出土遺物   |  |
| 図版10 | 1 繩文土器<br>3 八幡神社南側、調査後   | 2 遺跡中央部、調査前(南から)   |
| 図版11 | 1 SB01調査風景(北から)<br>3 SB05付近調査風景(東から)<br>5 発掘調査参加者の皆さん                          | 2 SB05付近調査風景(北から)<br>4 遺跡東地区、調査後(北から)  |
| 図版12 | 墨書き文字集成  |  |



第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（1/2500）

## I 調査に至るまでの経過

大泉村では、昭和54年度から開始された県営圃場整備事業に伴ない、昭和58年度までに6遺跡の埋蔵文化財発掘調査が県文化課及び県埋蔵文化財センターによって行われ、その成果は枚挙にいとまがない。昭和59年度は、大泉村西井出字東姥神を中心とする小岩清水工区の一部、約21.3haの圃場整備事業が予定され、昭和58年9月～12月、大泉村教育委員会による当工区内の試掘及び本調査が行われた。その結果、東姥神遺跡第2地点の一部でトレンチ調査によって平安時代の住居址2軒が確認され、該期の集落の埋没が予想されたが、その本調査は59年度にもち越された。従って今回の調査は昭和58年度調査に引き続くもので、東姥神遺跡第1地点と第2地点の一部を合わせて東姥神A遺跡と呼称することとし、それに対して今回59年度の調査区域を東姥神B遺跡と呼称する。（第1図）

## II 遺跡の位置と歴史的経緯

### 1 遺跡の位置

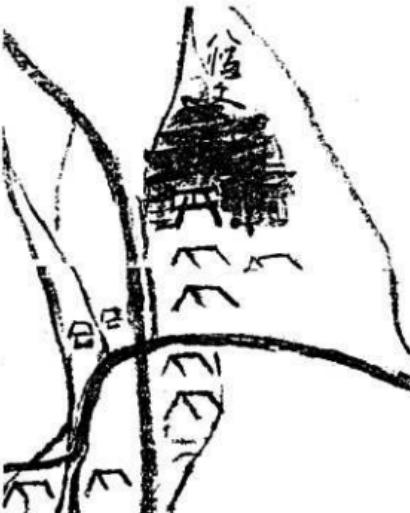
東姥神B遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村西井出字東姥神に所在する。標高885～891mの、八ヶ岳南麓の緩やかな傾斜をもつ舌状の尾根上に立地し、南斜面の抜群の日当りの良さと、八ヶ岳、富士山、甲斐駒ヶ岳等を望む景観のすばらしさに加えて、遺跡西を流れる泉川の豊かな水流は、今日においても人々の絶好の生活環境といえよう。

### 2 遺跡の歴史的経緯

本遺跡の発掘地区の北側に隣接して、八ヶ岳神社が鎮座する。この一帯がちょうど谷



第2図 天保9年古絵図  
(原寸、部分)



第3図 古絵図 (原寸、部分)

戸城址の約1km東北に位置しているため、この神社は谷戸城構築の際の鬼門除祭神として鎮祀されたのだという説明をする向きもあるが確証はない。甲斐国志（1814年）にはこの神社の記事はみられないものの、石段の寄石には、「明和二酉年」（1765年）と記され、また境内の石段のひとつに、「宝曆八戊寅天四月吉日」（1758年）とあることから、江戸中期に既に存在していたことは確実である。やや下って天保9年（1838年）の古絵図（第2図）と、やはり同じ頃のものと思われる古絵図（第3図）によれば、八幡神社付近の様子は現在とはほぼ変わりがないことがわかる。現況では、遺跡中央に農道と墓地を挟んで、その東西に水田、畠、桑園が広がり、調査地区的南側は、古絵図と同じように數軒の人家が集まっている。尚、付近の古老の話によれば、かつて八幡神社の南側に地下穴があり、当時人々は谷戸城への抜け穴であろうと噂したが、実際中へ入ってみると地下室であったとのこと。水田造成の際、潰されてしまったようであるが、それが今回の調査で発見された地下式壙のひとつであった可能性も強い。

本遺跡の所在する尾根起きは、昭和55年度の表面採集による遺跡分布調査では、本遺跡を含めてひとつの遺跡として理解されており、本遺跡の南を東西に横切る県道付近には、縄文時代～平安時代の遺物が濃密に散布している。また約100m東北には、昭和57年度に調査された東原遺跡がある。鍛冶工房址1軒を含む13軒の堅穴住居址からなる平安時代の集落址で、本遺跡と内容的に共通点があり、この両遺跡は切り離して考えることはできないと思われる。

### III 調査の方法と経過

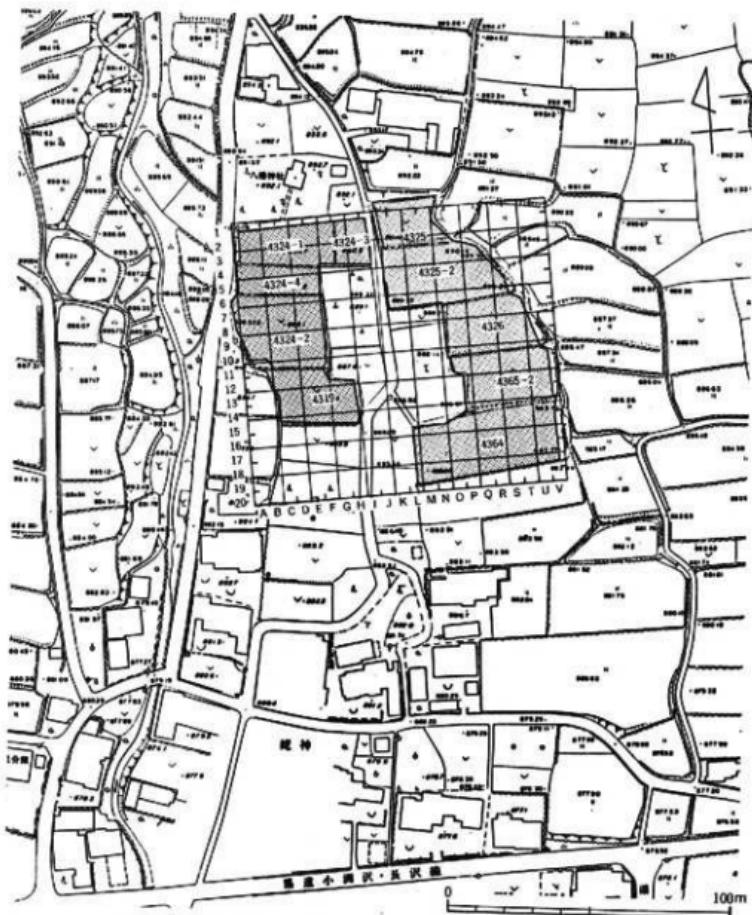
#### 1 調査方法

調査地区的農道西側地区は、昭和58年度の調査によって遺構が存在することが明らかにされ、重機によって遺構確認面まで表土を剥ぐとともに、鋤籠がけによって遺構を検出した。その堆土は田畠一枚毎に、それぞれ北側部分に遺構がないことを確めたうえで盛り上げ、その盛り土以外の部分を精査した。また農道東側地区はまず、人力及び重機によって2m幅のトレンチを東西方向に、田畠一枚毎に2～3本入れ、遺構の有無、上層の堆積状況を確認した後、農道西側部分と同様な調査方法を行なった。

確認面での遺構検出のあと、各遺構の調査を行うにあたり、まず磁北に基づく東西南北を基準線とする5m×5mグリッドを調査地区全域にかかる様に設定し、西→東へA～V、北→南へ1～20の組み合せによって各グリッドを表示した。

#### 2 調査経過

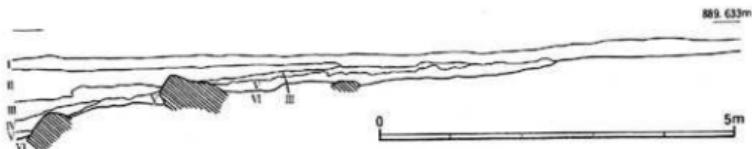
本遺跡の調査は、昭和59年5月1日より開始した。表土剥ぎ、グリッド設定と併行しながら、5月8日から遺構の調査に入った。6月8日には調査の終了した部分から全体図の作成を開始



第4図 発掘区域とその周辺 (1/2000, 区域内の数字は地番を示す)

した。6月14日、配石を伴う人骨一体が出土したため、6月16日には長坂署による調査を受けるとともに、同日関係者一同で供養を行う。その後、この人骨は中世の埋葬法を知る上で貴重な資料であるという認識に立ち、石膏によるレプリカを作成することを決定。6月29日よりラテックスを使用した型取り作業を開始し、7月2日に完成した。

7月10日、全ての作業を終了した。調査面積6120m<sup>2</sup>のうち、精査面積は2700m<sup>2</sup>。調査日数は57日、作業員は延べ648人を要した。



第5図 遺跡の層序 (1/80)

#### IV 層 序

本遺跡は、北から南への緩やかな傾斜地上に立地し、すぐ西側に泉川が流れているため氾濫、浸食等の影響によるものであろうか、調査区内における層序は必ずしも均等ではない。特にU、Vグリッドなど東端に近い部分では、水分を多く含んだ黒褐色土が厚く堆積した埋没谷となっている。また現況は水田、畑であり、北側を切り土して南側へ盛り土する方法で農道東側地区では5枚の田畠が、西側地区では4枚の畑が造成されており、部分的には地山まで削平が達しているため、遺構の多くが既に消滅していることが想像される。

第5図の層序は、B4、B5グリッド西側の南北セクションを示す。

##### I層 黒褐色土層

耕作土層であり、しまり、粘性弱く、小礫、ローム粒子等を多く含む。

##### II層 黄褐色土層

畑造成の際の盛り土層で、ローム土と黒褐色土の混合土である。小礫、地山の岩盤状ブロック（VI層）等を多く含む。しまり、粘性ややあり。

##### III層 黒褐色土層

畑造成前の表土層と考えられる。小礫、炭化物等がみられる。遺物の包含層である。しまり粘性ややあり。

##### IV層 茶褐色土層

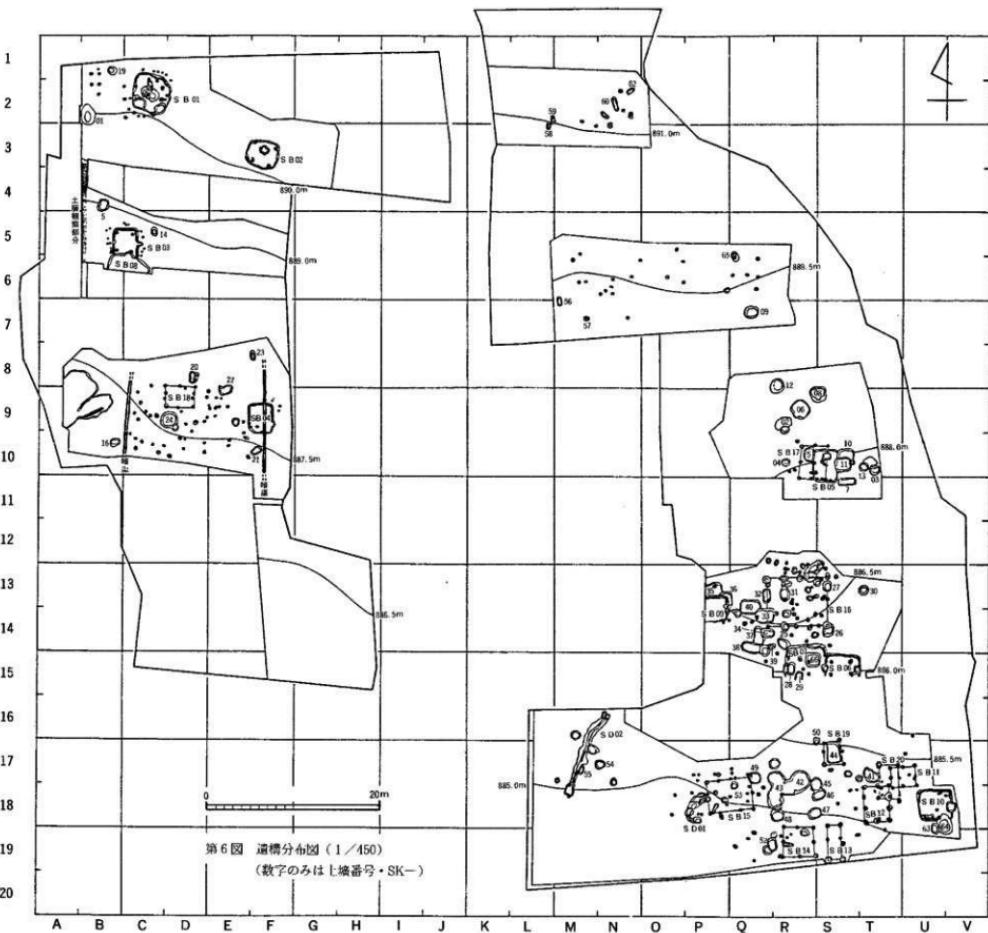
ローム漸移層である。ローム層中に黒褐色土が混入し、やや暗い黄色土を呈す。小礫、炭化物が僅かにみられる。

##### V層 黄色土層

ローム層。小礫を混入する。

##### VI層 黄色土層

いわゆる地山と呼ばれる層である。礫を多く含む粘質のローム層が岩盤状に硬化している。



## V 遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は、縄文時代中期後半の堅穴住居址1軒（SB02）、平安時代の堅穴住居址8軒（SB01、SB03～07、SB09、SB10）、時期不明の堅穴住居址1軒（S B08）、平安時代～中、近世の掘立柱建物址9軒（SB11～20）。縄文時代～中、近世の土壙（地下式壙、墓壙を含む）66基、溝状遺構2本である。（第6図）

出土遺物は、縄文時代前期～晚期の土器と石器、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、輪羽口、鉄製品、鉄製未製品、鐵滓、中・近世の土師質土器、内耳土器、陶器、磁石、石臼、中國錢、木片等である。

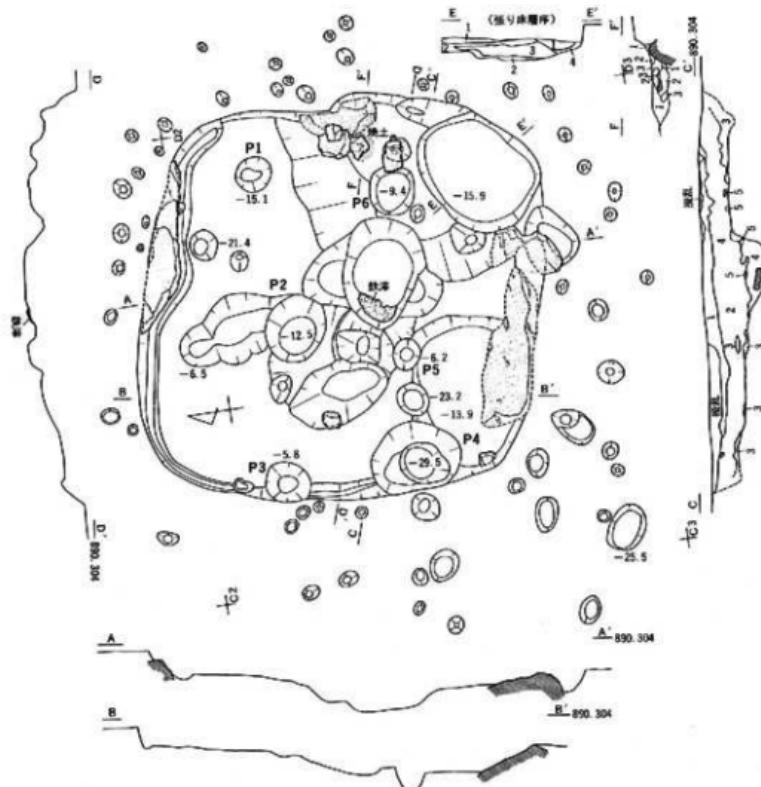
### 1 堅穴住居址（S B01～10）とその遺物

#### SB01（第7～9図、図版1-1～3, 7）

遺構 C2グリッドに位置する。耕作に伴うトレーナー状の擾乱が東西に2本走り、覆土上層部及びカマド中央部を擾乱しているため、必ずしも遺存状態は良好とはいえない。平面形は隅丸方形を呈し、東西4.10m×南北4.20m、土軸方向はE16°Sである。覆土は次のとおり。1層 黒色土層-スコリアを少量含み、粘性がある。2層 黒褐色土層-ローム粒子、ロームブロックを含み、床面に近い部分では炭化物、鐵滓が含まれる。3層 黄褐色土層-ローム質の層。4層 暗黄褐色土層-炭化物、焼土、ローム粒子を多く含み粘性強い。鐵滓小片を多く含む。5層 焼土層。北西寄りの床面は、岩盤層を平坦に整形し非常に堅いが、東南コーナー付近は荒い掘り方の土部に張り床を施している。張り床の層序は、1層 焼土層-ローム粒子、黒色土、炭化物を含む焼土層。しまりはあるが、粘性弱い。2層 黒色土層-ローム粒子、ロームブロックを含み、しまり、粘性共にあり。3層 黄褐色土層-ローム粒子を多く含み、しまり、粘性共にあり。4層 黄色土層-ローム。南壁と北壁の中央部にはそれぞれ巨石が盛りし、住居址の南北幅を制限している。周溝は北壁下から南壁下まで巡り、北壁の巨石下では石の輪郭に沿って周溝もカーブしている。ピットは大小12本程検出されたが、主柱穴はP1、P2、P3、P4、P5、P6の6本であろう。カマドは東壁ほぼ中央部に構築されているが、前述のとおり擾乱によって、一部の袖石と焼土の堆積を残すのみであり、袖石の多くは北東コーナー付近に散乱していた。カマドの層序は次のとおり。1層 茶褐色土層-ローム塊、ローム粒子をやや多く含む。焼土粒子を混入する。2層-焼土層。3層 黄色土層-非常に硬くしまった粘土質のローム。住居址のほぼ中央部には1.1m×0.8m、深さ25cmのピットがあり、焼土、炭化物を充填し内壁には鐵滓が多く付着していた。住居址覆土中からは輪羽口片、鐵滓、鐵器未製品等の遺物が出土し、本址は中央ピットを中心とした小範囲的作業の場であったことは明らか

かである。また東南コーナーの張り床面に平板状の石を2列に配列した配石が検出された。更に南壁東寄りに壁を切って、土師器壺1点を包含するピットが検出された。共に用途は不明であるが本址に関わる施設と考えたい。

**遺物** 本址の覆土、カマド付近及び中央ピットから多くの遺物が出土した。1, 2は内面黒色の土師器で、信濃方面からの搬入品かと思われる。2は中央ピット上層から出土し、口縁部外面に口縁側を下にして、墨書文字「平」が2文字、相対する位置に書かれている。3は須恵器壺で、南多摩窯址群の御殿山59号窯式併行期（875～900年頃）と考えられる。4は甲斐型土師器壺で、住居址南壁を切るピット中から出土した。底部に墨書文字「高」が書かれている。底径／口径比は45%であり、甲斐地域編年（以下「編年」と略す）IX期（900～925年頃）に相当するものと思われる。5はロクロ成形による土師器壺で、1, 2と同様信濃方面からの搬入品（神奈川考古 第14号に載る）

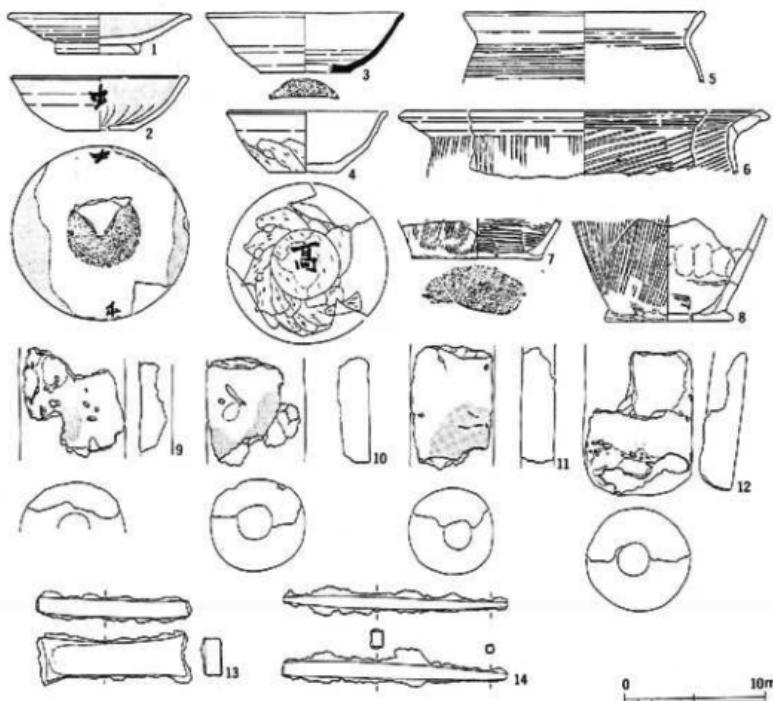


第7図 SB01 (1/60)



第8図 SB01 遺物出土状況 (1/60)

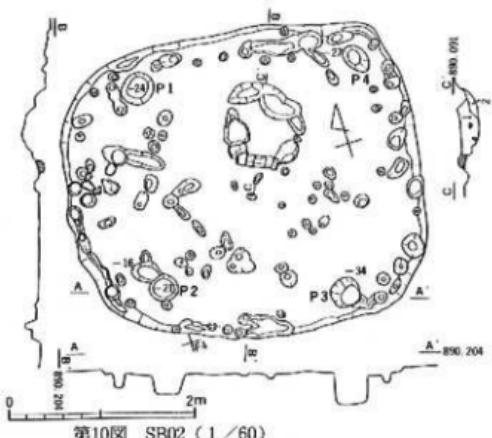
入品であろう。6～8は土師器壺の口縁～底部である。6と8は胎土、焼成が同一なため、同一個体の可能性が強い。9～12は藤羽口の破片で、いずれも二次焼成による変色部がみられる。9と12、10と11は同一個体の可能性がある。直径6～7.5 cm の円筒形を呈し、直徑2～2.5 cm の孔が中央に貫通するものと思われる。胎土には径0.1～0.5 cm 程の白色粒子を多量に含み、少量のスコリアもみられる。9には薬屑と思われる植物纖維片が混入されている。13、14



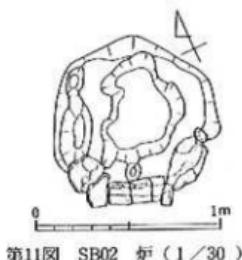
第9図 SB01 出土遺物 (1/4)

は鉄器未製品であり、共に西南コーナー付近の床面から僅かに浮いて検出された。一体どの様な鉄器に成形する予定であったのか全く不明である。以上の他に、覆土中から鉄滓が多量に出土した。1cm~19cm大の鉄滓が約299点、総重量は13.2kgにも達する。

本址は甲斐型壺・須恵器壺の編年的位置づけから、10世紀前半の所産と思われる。



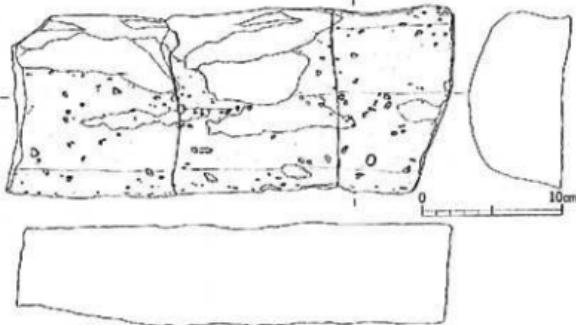
第10図 SB02 (1/60)



第11図 SB02 炉 (1/30)

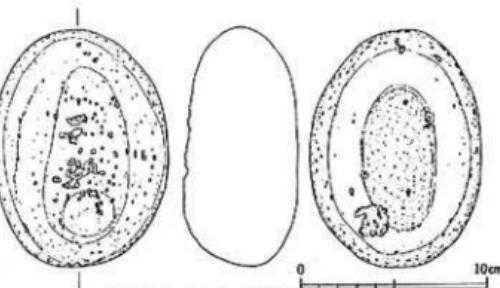
#### SB02 (第10~13図、図版1~4)

造構 E・F3グリッドに位置する。SB01同様の擾乱が床面までおよび、また床面に近いレベルまで耕作によって擾乱され、幸うじて壁が確認されたという有様であった。平面形は隅丸方形を呈し、東南3.7m×南北3.3m、主軸方向はN16°Eである。覆土は炭化物を多く含む黒褐色土からなる。床面は全体的に軟弱だが、硬化面が部分的に存在する。周溝は南西コーナーに一部残存するのみである。主柱穴はP1, P2, P3, P4の4本である。炉は中央やや北寄りに位置し、北側半分の炉石が抜かれているが、円形石畠炉と思われる。90cm×90cm、深さ25cmを測る。炉内覆土は、1層 黒褐色土層一ロームブロック、焼土、炭化物を多量に含む。2層 黄褐色土層一燒土、炭化物を多く含む。炉石の中央部、即ち正面の炉石は、縦に半截された石棒片を



第12図 SB02 炉石転用石棒 (1/4)

使用している。炉の西側、壁寄りの位置から磨石1と礫数点からなる集石が認められた。礫には、剥離痕のみられるチャート質の石核状を呈すものが数点ある。本址からは土器片が一片も出土せず、時期決定は困難である。

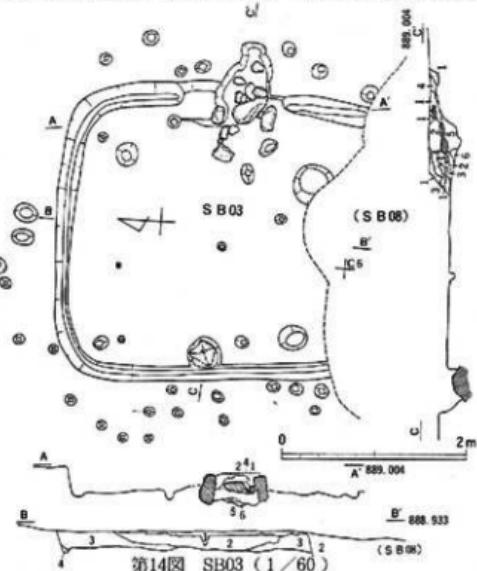


第13図 SB02 磨石 (1/3)

**遺物** 前述のとおり、土器片は1片もない。炉石に転用された石棒片と、炉の西側に他の礫と共に検出された磨石のみである。石棒片（第12図）は花崗岩系石材を用い、長軸方向に磨面がみられる。ほぼ3等分に破損しているが、現存する長さは31cm、巾12.5cm。燃焼面は剥離が激しく、二次焼成痕が明瞭に残る。磨石（第13図）は安山岩系石材を用い、磨面はその表面にスス状のカーボンが付着し、中央部よりもその外縁に使用痕が認められる。その裏面はあばた状の加工痕が残り、その中央部に2ヶ所の凹部がみられる。この2点の石器から確実な時期を導くことはできないが、住居址形態と合わせて考えて、縄文時代中期後半の所産であろう。

#### SB03 (第14、15図、図版1-5)

**遺構** B・C5グリッドに位置する。SB08に切られて南側壁部を欠失するが、全体的にみて遺存状態は良好である。平面形は東西3.20m、主軸方向はE4°Nを示す。覆土は次のとおり。1層 黒褐色土層—旧表土層。2層 茶褐色土層—ロームブロックをまばらに含み、粘性がある。3層 茶褐色土層—ロームブロックを全体的に含む。4層 黄色土層—地山と同質のローム。床面は硬くしまり、周溝は南壁とカマド部を除いて全周する。ピットは4本程みられるが、主柱穴と断定しかねる。カマドは東壁ほぼ中央に構築され、天井石が崩落していたが、袖石、支脚石は遺存していた。カマド部の層序は次のとおり。1層 黒褐色土層—ローム粒



第14図 SB03 (1/60)



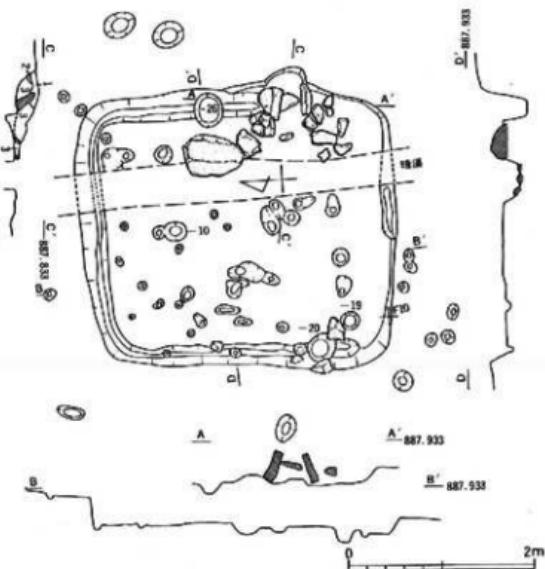
第15図 SB03 出土遺物 (1/4)

子を含み、粘性はあるがしまりはない。2層 茶褐色土層—ロームブロック、礫、炭化物を含んだ砂質土。しまりあり。3層 明茶褐色土層—ロームブロックを多く含み、しまり強い。4層 黄色土層—ロームに小礫を含む。5層 茶褐色土層—焼土粒子、炭化物をやや多く含み、しまり、粘性共にあり。6層 赤色土層—焼土層。7層 黄褐色土層—ローム粒子、焼土粒子、炭化物が多くみられる。

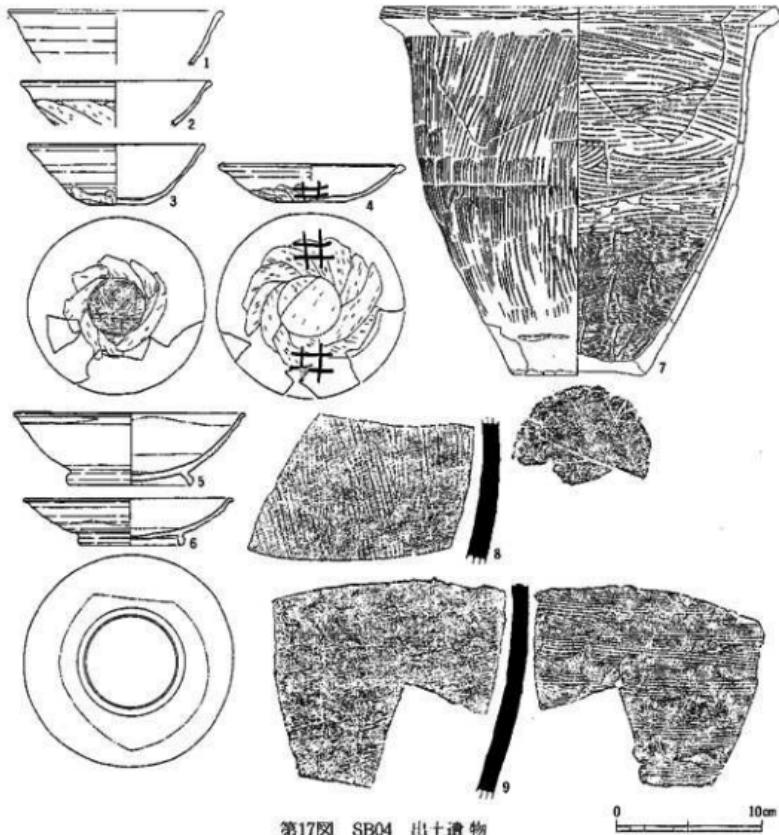
**遺物** 本址からは覆土中とカマド部から土師器数片が出土したのみである。1は内外面黒色の土師器壺の口縁部片。2は土師器壺口縁部である。黒色土器の存在と、壺の口縁部形態から10世紀前半の所産であろう。

#### SB04 (第16~18図、図版1-7・8、8)

**遺構** E・F9グリッドに位置する。本址の中心やや東寄りに、南北に約40cm幅の暗渠排水が走り床下まで破壊されているが、それ以外の遺存状態は良好である。平面形は隅丸方形で、東西2.9m×南北3.3m、主軸方向はE2°Nを示す。覆土は、1層 黒褐色土層—ロームブロックを全体的に含み、粘性はややある。下層では炭化物を含む。床面はローム面を平坦に整形し、硬くしまっている。周溝は北壁下から西壁下と、東壁下の一部を巡る。ピットは2本以上検出されたが、主柱穴は不明。カマドは東壁やや南寄りに構築され、天井石、袖石共に遺存状態は割合良好である。カマド部の層序は次のとおり。1層 黒褐色土層—ローム粒子を含み、しまりあるが粘性弱い。2層 黄褐色土層—



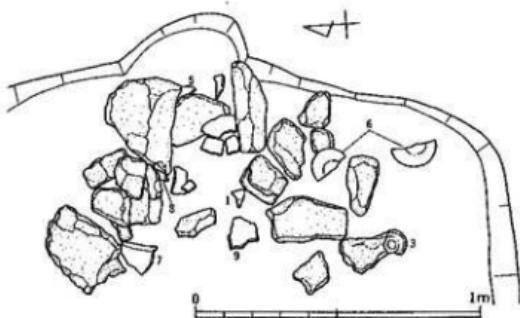
第16図 SB04 (1/60)



第17図 SB04 出土遺物

ローム。3層 茶褐色土層一  
焼上粒子。炭化物を少量含み,  
しまり、粘性共にあり。

遺物 本址からはカマドを  
中心として多数の遺物が出土  
した。1~4は甲斐型土師器  
である。底径／口径比は3  
が34%，4が38%である。暗  
文は全くなく、口縁部は玉縁



第18図 SB04 カマド付近遺物出土状況 (1/20)

を呈し、編年XI期（950～975年頃）に比定されよう。4は外面に墨書文字「井」が2ヶ所、口縁部を下にして相対する位置に書かれている。5、6は灰釉陶器である。5は東濃系編年でいう光ヶ丘1号窯式に比定される壺で、内外面胴部及び、内面底部に刷毛焼りで釉薬がかけられている。6は同じく東濃系編年でいう大原2号窯式の古段階に比定される皿で、内外面潰けがけによって釉薬がかけられている。高台は共に三ヶ月形を呈す。7は土師器甕で、同一個体の口縁部、胴部及び底部片である。口縁部は肥厚し、その形態から10世紀後半に比定される。本資料にみられる内面の刷毛目は胴部と底部付近でハケが違なっているのが注意される。

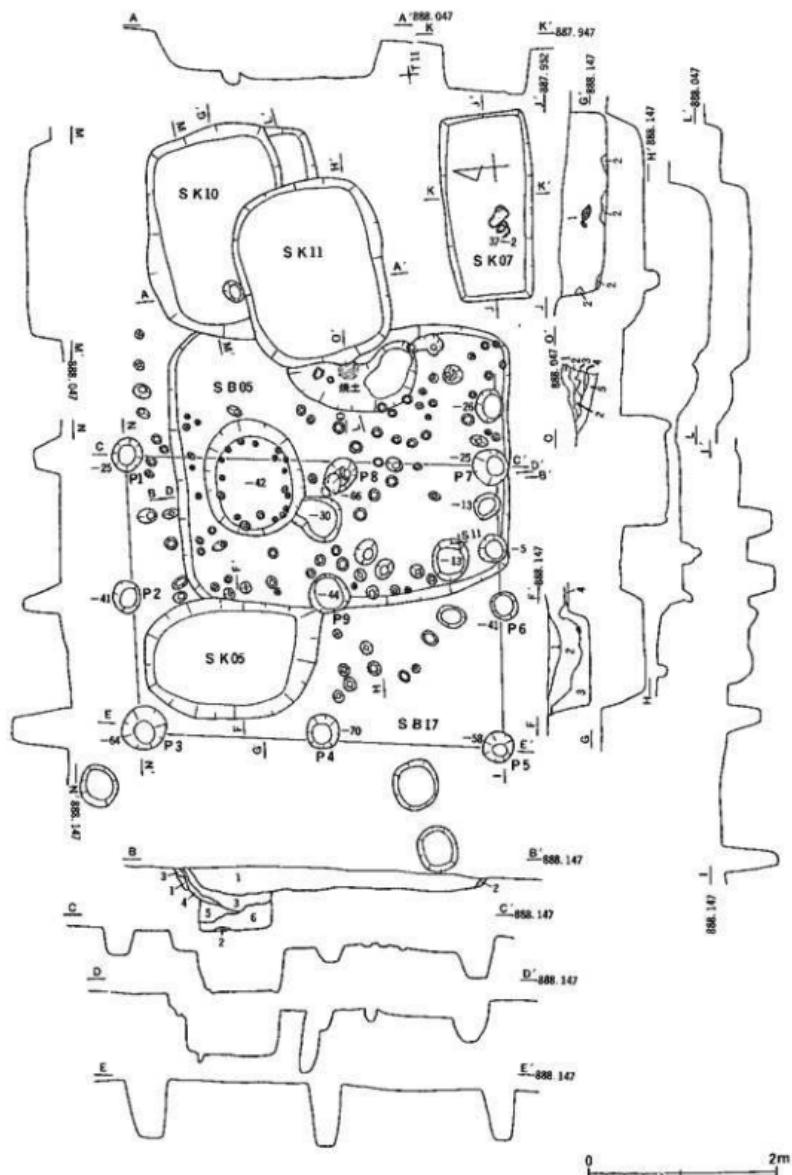
本址は出土遺物から10世紀後半と思われる。

SB05（第19、20図、図版2-1、8）

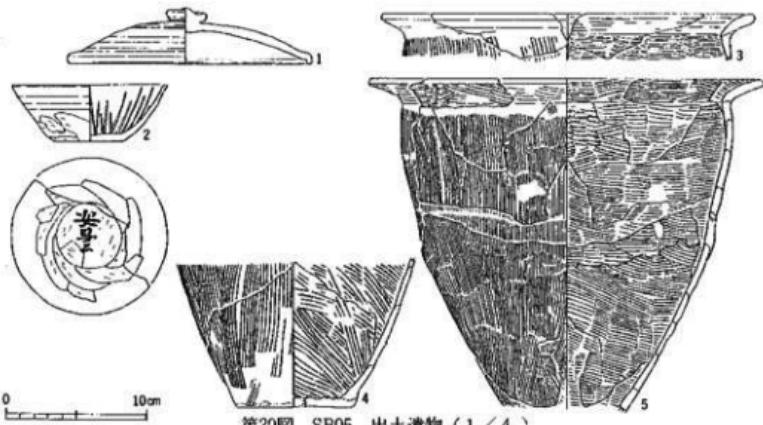
遺構 R・S 10グリッドに位置する。本址東側にはSK10、SK11がカマドを切って重複し、西側にはSK05、SB17が重複するため遺存状態は良好ではない。平面形は隅丸方形を呈し、東西2.9m×南北3.5m。主軸方向はE 5° Sを示す。覆土は次のとおり。1層 黒色土層一ロームブロックを全体的に含み、しまり弱く粘性あり。2層 暗褐色土層一壁体の崩土。3層 黒色土層一1層よりもローム粒子の量が多い。4層 黄褐色土層一ローム粒子の量が多くしまり弱い。5層 黑褐色土層一径2～3cmのロームブロックを多く含んだ黒色土。しまりなし。6層 黑褐色土層一ローム粒子を非常に多く含み、しまりなし。床面のほとんどが黒褐色土中に掘り込まれていることと、床面が非常に軟弱であったことにより、床面検出は難行した。周溝はない。床面にはSB18の柱穴を含む多数のピットが検出されたが、本址に伴う柱穴は判然としない。床面には中央やや北寄りに1.25m×1.0m、深さ40cmの楕円形を呈す土壇があり、覆土の堆積状況から本址と同時期の所産と思われる。カマドは東壁中央部にあり、前述のとおりSK10、SK11に大半を破壊されている。カマド部の層序は次のとおり。1層 黒色土層一小礫を多く含み、しまり、粘性共になし。2層 黄褐色土層一ローム中に黒色土が混入し、しまり、粘性共に弱い。3層 黑褐色土層一ロームブロック、焼上ブロック、炭化物を多く含み、しまり弱く粘性あり。4層 焼上層一焼土中に黒褐色土を少量含む。5層 黑褐色土層一3層よりも焼土ブロック、炭化物を多く含む。しまり弱く粘性あり。SK10上層の焼土、石等は本址カマド部のものである可能性が強い。

遺物 遺物は、床面直上と、カマド付近から出土した。1は土師器蓋であり、頂上部には擬宝珠状の平たいまみをもち、口縁端部には立ち上りがある。暗文はない。2は甲変型土師器甕であり、底部に「安雲」の墨書文字をもつ。口縁形態は丸形を呈し、内面には放射状の暗文をもつ。底径／口径比は44%であり、編年XII期（900～925年頃）に比定されよう。3～5は土師器甕であり、3と4は、胎土、焼成から同一個体の可能性が強い。5は口縁部内外面に刷毛目がみられ、また胎土、焼成が他の土師器と異なった様相をもつ点である。

本址の時期は以上から10世紀第1四半期（900～925年頃）に比定されよう。



第19図 SB05, SB17, SK05, SK07, SK10, SK11 (1/60)



第20図 SB05 出土遺物 (1/4)

**SB06 (第21、22図、図版2-2・3)**

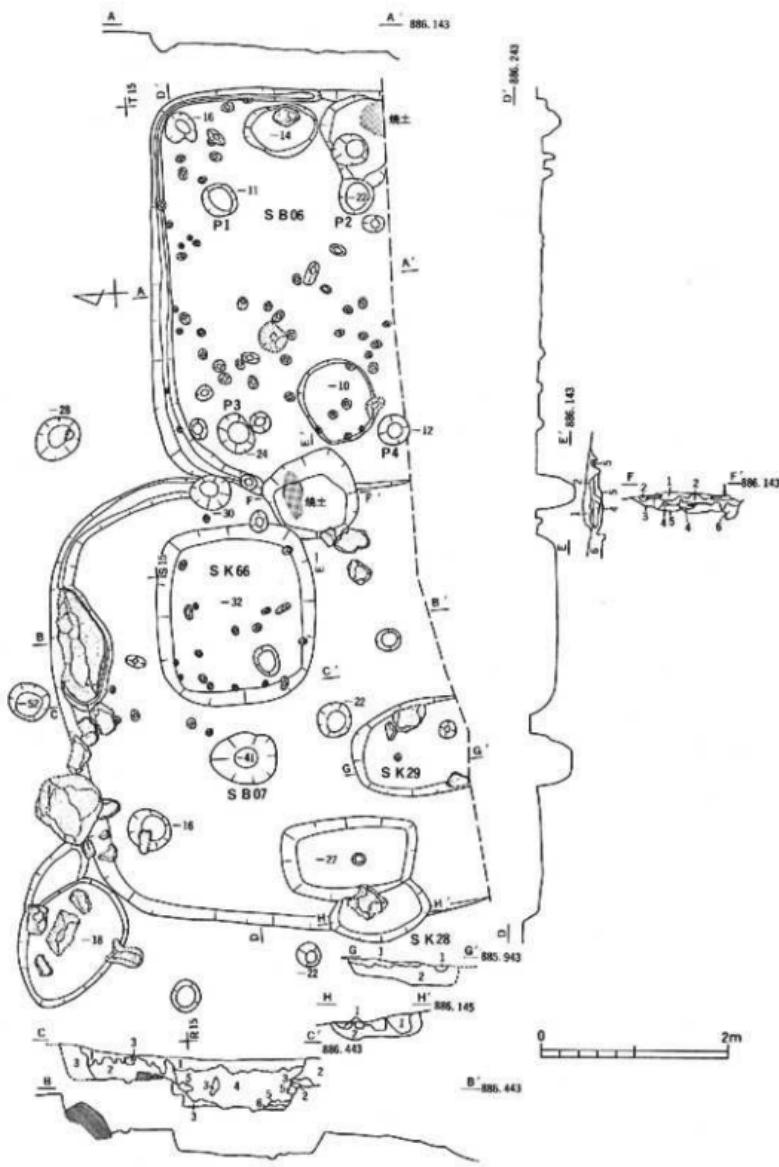
**遺構** S15グリッドに位置する。水田造成に伴う段切りによって南半分を完全に破壊され、西側はSB07と西壁部で重複しているため、住居址の全容は明らかではない。平面形は隅丸方形と思われ、東西4.2m。主軸方向はE2°Wを示す。覆土はローム粒子・ロームブロック、小礫をやや多く含む黒色土層で、しまり、粘性共に強い。床面はローム面を平坦に整形し硬くしまっている。周溝は東壁下～北壁下～西壁下の一部にかけて巡る。柱穴はP1、P2、P3、P4の4本が確認された。カマドは段切りによってほぼ完全に破壊されているが、焼土が一部残存する。

**遺物** 遺物は床面上から極く僅か出土したのみである。1は灰陶陶器底部片である。高台は三ヶ月形を呈し、大原2号窯式と考えたい。高台部の輪郭は完存し、底部外表面がやや磨滅しており、破損のし方も不自然なため、これが転用窯として使用された可能性もある。2は羽釜口口縁部と思われる。

本址は羽釜の出土から編年 XII期以降(975~1000年頃以降)と思われる。

**SB07 (第21、23図、図版2-4・9)**

**遺構** R-S14・15グリッドに位置する。SB06同様、水田造成時の段切りによって南側を破壊され、東側はSB06と重複する。また床面、西壁部にはSK28、SK29、SK66等の土壙が重複する。平面形は隅丸方形を呈し東西4.7m主軸方向はE2°Sを示す。覆土は次のとおり。1層 黒色土層一小礫を多く含み、しまり、粘性共にあり。2層 黑褐色土層 ローム粒子、ロームブロックを含み、しまり、粘性共にあり。小礫を多く含む。3層 黄褐色土層 ローム粒子、ロームブロックを多く含む。4層 黑褐色土層 ロームブロックを非常に多く含む。粘性はあるがしまりなし。5層 黄色土層 ロームブロック。6層 黑色土層 4層に近い。床面は西側を除き平坦で硬くしまっている。北壁にはSB01と同じく巨石が露呈し、住

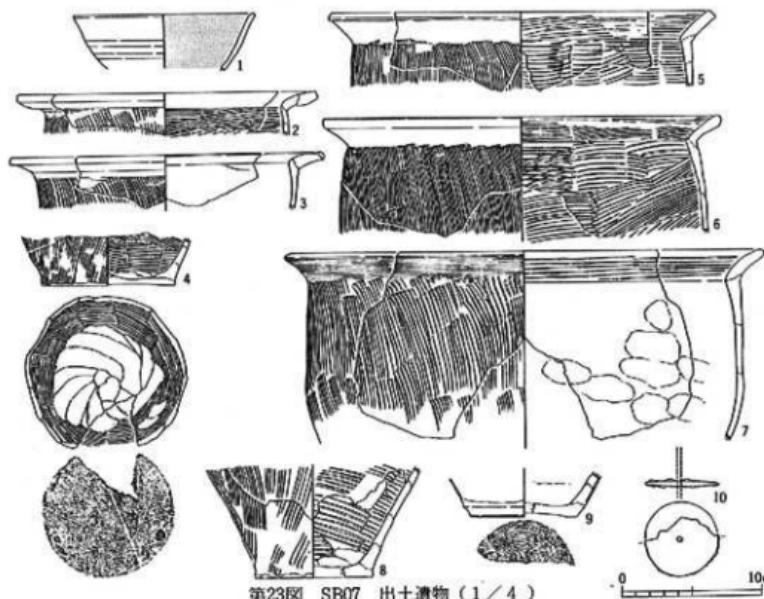


第21図 SB06, SB07, SK28, SK29 (1/60)



第22図 SB06 出土遺物 (1/4)

0 10cm

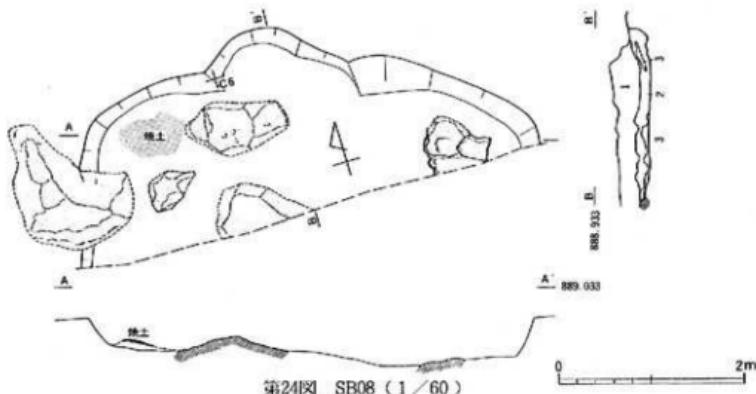


第23図 SB07 出土遺物 (1/4)

0 10cm

居址の北側を制限している。周溝は東壁下の一部から北壁下の一部にかけて巡り、巨石脇ではSB01と同じ状況がみられた。ピットは5本あるが、主柱穴と断定できるものはない。床面には数基の土壙が検出されたが、そのうちセクションにみられるSK66は明らかに後世のものである。カマドはSB06によって上部構造を破壊され、構築材が床面に散乱していた。カマド部の層序は次のとおり。1層 黒褐色土層—ローム粒子、ロームブロックをやや多く混入する。焼土粒子も少量含まれる。しまり、粘性共にあり。2層 茶褐色土層—ローム粒子、ロームブロックを多く含み、しまり、粘性共にあり。炭化物、焼土を含む。3層 暗褐色土層—粒子は細かく硬くしまっている。4層 黄色土層—被熟したローム。5層 焼土層。6層 暗茶褐色土層—黒色粒子を多く含み、しまり弱いが粘性あり。

遺物 土師器がカマドを中心として少量出土した。1は内面黒色土師器坏である。2~9は土師器甕で、2、3はやや小形の甕である。8は内面にタール状の付着物（黒色処理によるものか）のある甕底部片である。9はロクロ調整された甕底部片であり、底部には糸切り痕がみられる。10は鉄製紡錘車片で、直径約5.0cmを測る。



第24図 SB08 (1 / 60)

本址は、内面黒色土師器壺の共伴と、土師器壺口縁部形態から10世紀前半におさえて大過あらまい。

#### SB08 (第24図、図版1-5)

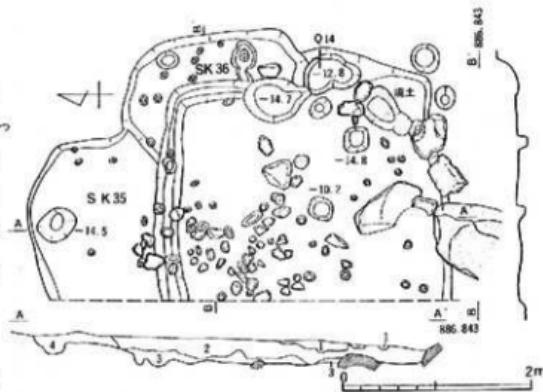
遺構 B・C6グリッドに位置し、SB03の南側に重複する。畠地造成時の段切りによって本址南側の大半を失っており、遺存状態は良好ではない。平面形は隅丸方形と思われ、東西4.7mを測る。覆土は次のとおり。1層 黒褐色土層一小疊、スコリアを少量含み、しまり強く粘性あり。2層 茶褐色土層一ローム粒子、ローム塊を多く含み、しまり、粘性共にあり。3層 黄褐色土層一ロームと2層の混合土。床面は軟弱で、巨石が数個露出している。周溝、柱穴共になし。床面上には、北西コーナーで焼土が床からやや浮いて堆積しているのが検出されたが、カマド等の施設はない。

遺物 前述のとおり、本址に伴う遺物は全くない。

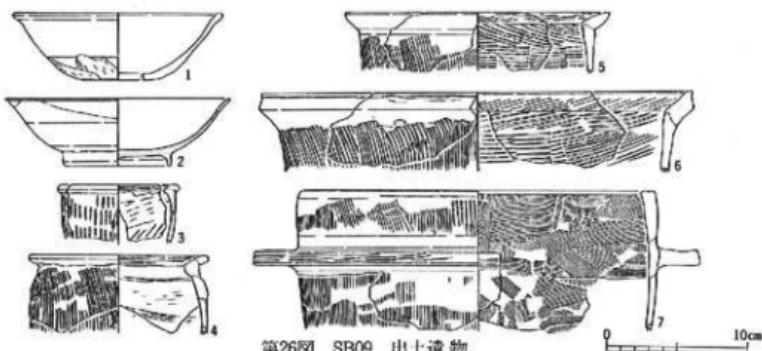
#### SB09 (第25、26図)

##### 図版2-5・6、9)

遺構 P13・14グリッドに位置する。調査地区外にかかって検出され、また北壁及び東壁部に土壤が重複しているため全容は明らかではない。平面形は隅丸方形を呈し、南北3.1m、主軸方向はE 1° Sを示す。本址及びSK35の層序は次のとおり。1層 黒色土層一ローム粒子を僅かに含み



第25図 SB09, SK33, SK36 (1 / 60)



第26図 SB09 山上遺物

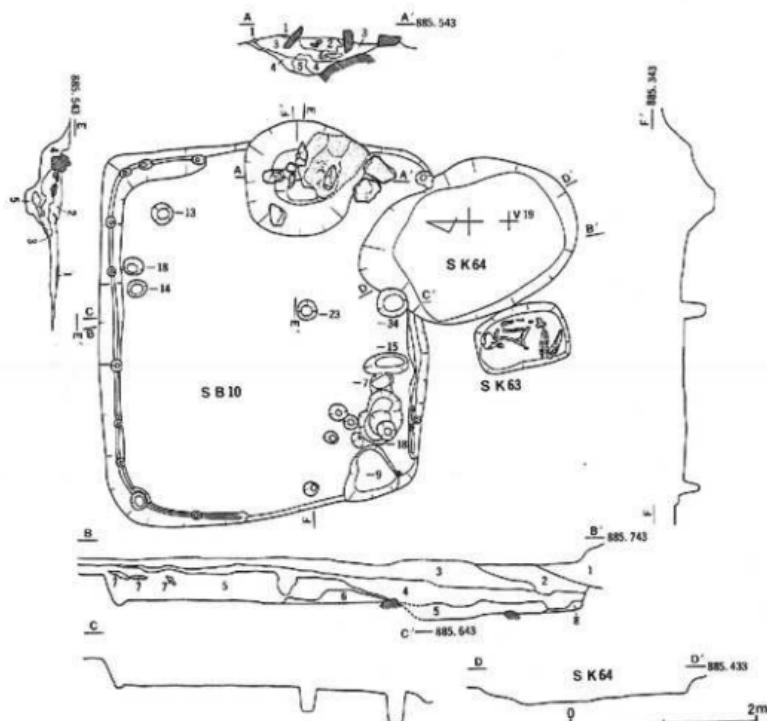
しまり、粘性あり。2層 黒褐色土層—ロームブロック、ローム粒子を全体的に含み、しまり、粘性共に強い。3層 黄褐色土層—ロームブロック、ローム粒子を非常に多く含み、粘性、しまり共に強い。張り床と思われる。4層 茶褐色土層—ロームブロック、ローム粒子を多く含み、粘性、しまり共に強い。炭化物が少量含まれる。鉄分が酸化し赤味がかっている。セクションにより、本址はSK35、SK36より新しい。掘り方面は、粘性をもったローム面に小石が数多く露出しており、平坦ではない。周溝は東壁下の一部から北壁下にかけて巡る。ピットは3本程度検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは上部構造がほぼ完全に消失しているが、僅かに焼土が東壁の南寄り、東南コーナー付近に確認された。

**遺物** 覆土中から、散乱したカマドの石と共に少量の遺物が検出された。1は甲型土師器坏で、底径／口径比は38%である。2は灰釉陶器で、大原2号窓式に比定される壇である。内面及び口縁部外面に、潰けがけによる釉薬がみられる。3～6は土師器壺である。3、4は小型の壺で、特に3は堆定口径約8cmと極小である。7は土師器羽釜口縁部である。

本址は、甲型坏、壺の口縁部形態及び羽釜の伴出から、編年 XIII期（975～1000年頃）の所産と思われる。

#### SB10 (第27、28図、図版2-7、9)

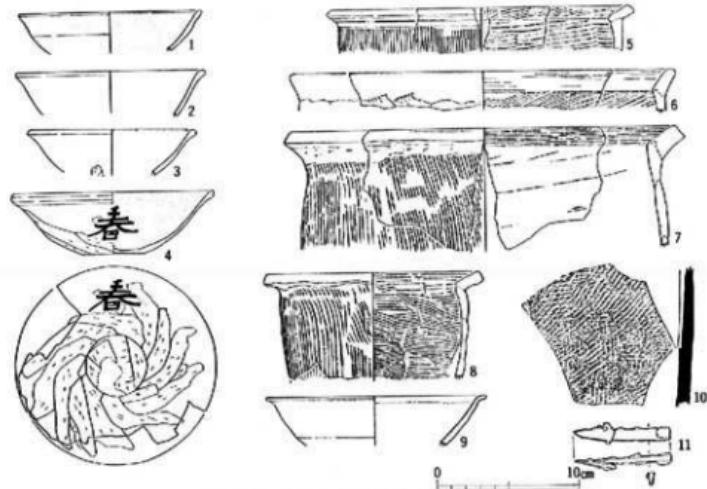
**遺構** U・V18グリッドに位置する。南側をSK6.4に切られているものの遺存状況は良好である。平面形は隅丸方形を呈し、東西4.0m×南北3.5m、主軸方向はE1°Nを示す。本址及びSK6.4の層序は次のとおり。1層 黒褐色土層一小疊（径0.5～2.0cm）、ローム粒子を多量に含み、しまり、粘性は共に弱い。2層 黄褐色土層—ローム塊、ローム粒子、小疊を多く含み、しまり、粘性共にあり。3層 暗褐色土層一小疊、ローム粒子を多く含み、粘性はあるがしまりは弱い。4層 暗黒色土層一小疊を多く含む。炭化物、スコリアも含む。しまり、粘性共にあり。5層 黒褐色土層一小疊、炭化物、スコリアを多く含み、しまり、粘性共にあり。遺物包含層である。6層 暗褐色土層—2層に近い。焼土粒子を部分的に多く含む。しまり、粘性共にあり。7層 暗褐色土層—ロームブロックを多く含み、2層に近い。8層 黄色



第27図 SB10, SK63, SK64 (1/60)

土層一壁体の崩土。床面は全体的に硬くしまっている。周溝は東壁下北寄り～北壁下～西壁下北寄りと、南壁下にみられる。周溝中には11個程の小孔が検出されたが、その間隔は一定していない。ピットは10本程検出されたが、そのうち西南コーナーにみられるピットは主柱穴と考えられる。カマドは東壁中央部に位置し、天井部は欠くが、袖石、支脚石は遺存する。カマド部の層序は次のとおり。1層 黒褐色土層一炭化物、焼土ブロックを非常に多く含み、粘性はないがしまりあり。2層 茶褐色土層一焼土粒子、ロームブロックを非常に多く含み、しまり、粘性共にあり。3層 黒褐色土層一ローム粒子を含み、しまり、粘性共に強い。4層 暗黄褐色土層一ローム中に黒褐色土を混入し、しまり、粘性共に強い。5層 明黄色土層一ロームが被熱している。カマド下部には径1.2m×1.2mの掘り込みがあり、カマド構築時の施設と考えられる。尚本址上層から中世の遺物が多く検出されたが、造構は確認できなかった。

遺物 本址からは、カマドを中心として少量の遺物が出土した。1~4は土師器壺であり、中でも2~4は甲斐型壺の特徴をもつ。4は底部／口径比31%を示し、外面に底部を下にして墨書き文字「春」が一文字書かれ、内面には黒色処理が施されている。5~8は土師器壺口縁部



第28図 SB10 出土遺物 (1 / 4)

片で、5はやや小型の甕であり、8は小形の甕である。10は須恵器大甕の胸部片であり、外面に叩き目痕がみられる。9は灰釉陶器片で、内外面に刷毛塗りによる釉薬がかけられており、光ヶ丘1号窯式に比定される焼である。11は鉄製刀子片で、断面三角形を呈し、先端が折れて後方と鉗びついている。推定の長さ8.5 cm、巾0.8 cmを測る。

本址は以上の出土遺物から、編年XII期(975~1000年頃)に比定されよう。

## 2 挖立柱建物址(SB11~SB20)とその遺物

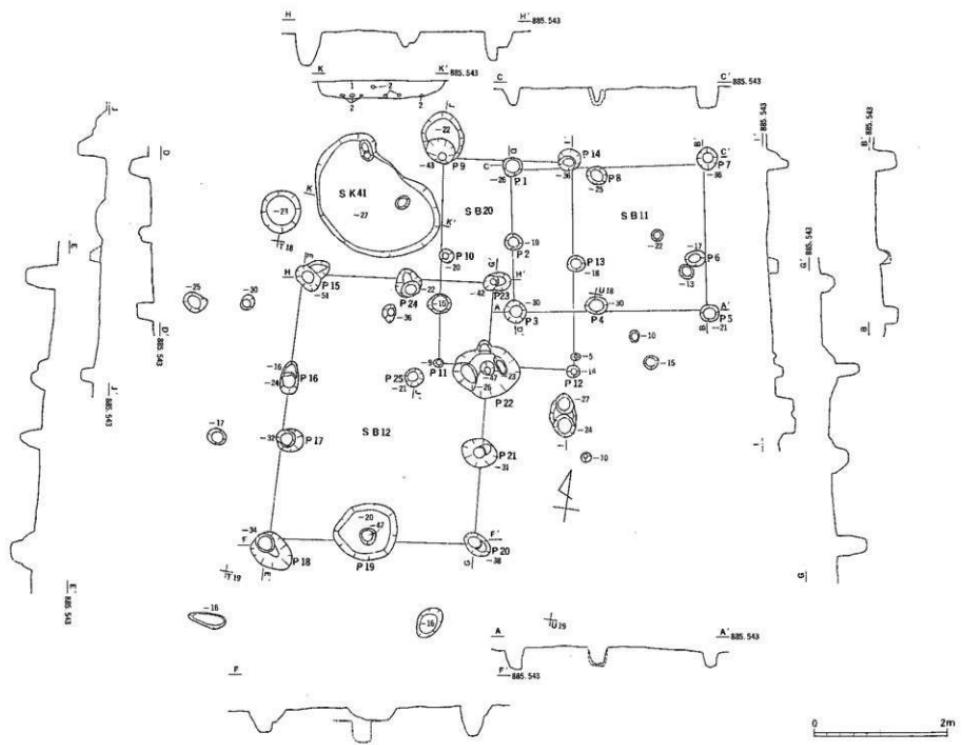
### SB11 (第29図、図版2-8)

遺構 T・U17・18グリッドに位置する。東西3.0 m×南北2.20 m、2間×2間の掘立柱建物址であり、主軸方向はN 8° Wを示す。柱穴は8本検出された。その間隔は、P1-P2間1.1 m、P2-P3間1.1 m、P3-P4間1.3 m、P4-P5間1.8 m、P5-P6間0.9 m、P6-P7間1.5 m、P7-P8間1.7 m、P8-P1間1.3 mと一定していない。西側をSB20と重複するが本址とSB20を合わせて一棟と考えることも可能である。

遺物 P7より内面黒色土師器坏片が出土した。

### SB12 (第29、39図、図版2-8)

遺構 T18グリッドに位置する。東西3.0 m×南北4.0 m、2間×3間の掘立柱建物址であり、主軸方向はN 6° Wを示す。柱穴は10本検出された。その間隔は、P15-P16間1.7 m、P16-P17間0.9 m、P17-P18間1.7 m、P18-P19間1.7 m、P19-P20間1.7 m、P20-P21間1.4 m、P21-P22間1.3 m、P22-P23間1.4 m、P23-P24間1.3 m、P24-P15間1.7 mと一定規則に基づいて配置されていることが推測される。北東側をSB20と重複する。

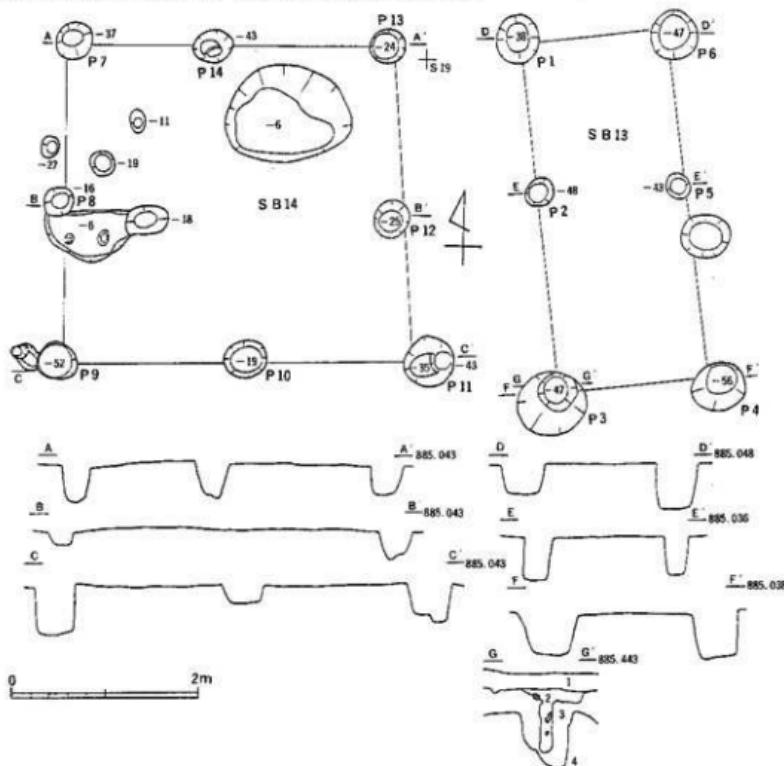


第29図 SB11, SB12, SB20, SK41 (1/60)

遺物 本址内のピット (P25) 中より元穀通室 1 枚 (第39図16) が出土した。本址に直接関わるものかどうかは不明である。

### SB13 (第30図、図版3-1)

遺構 SB18・19グリッドに位置する。東西1.6m×南北3.7m, 1間×2間の掘立柱建物址であり、主軸方向はN 8° Wを示す。ピットは7本検出されたが、本址の柱穴は6本であろう。その間隔は、P1-P2間 1.7m, P2-P3間 2.2m, P3-P4間 1.8m, P4-P5間 2.2m, P5-P6間 1.7m, P6-P1間 1.8mである。P3, P4では木柱痕が確認されたが、このうちP3の層序は次のとおり。1層 黄褐色土層—ローム塊、小礫を多量に含み、しまり、粘性共なし。2層 黄褐色土層—1層に近いが、ローム粒子、小礫がやや少なく、しまりあるが粘性は弱い。礫が混入する。3層 黒褐色土層—小礫が多く含む、やや粒子の細かい上。スコリアも含まれる。4層 茶褐色土層—ローム粒子、スコリア、小礫が多く含まれ、粘性、しまり共に強い。尚、遺構確認面は4層上面である。



第30図 SB13, SB14 (1/60)

遺物 本址に伴う遺物はない。

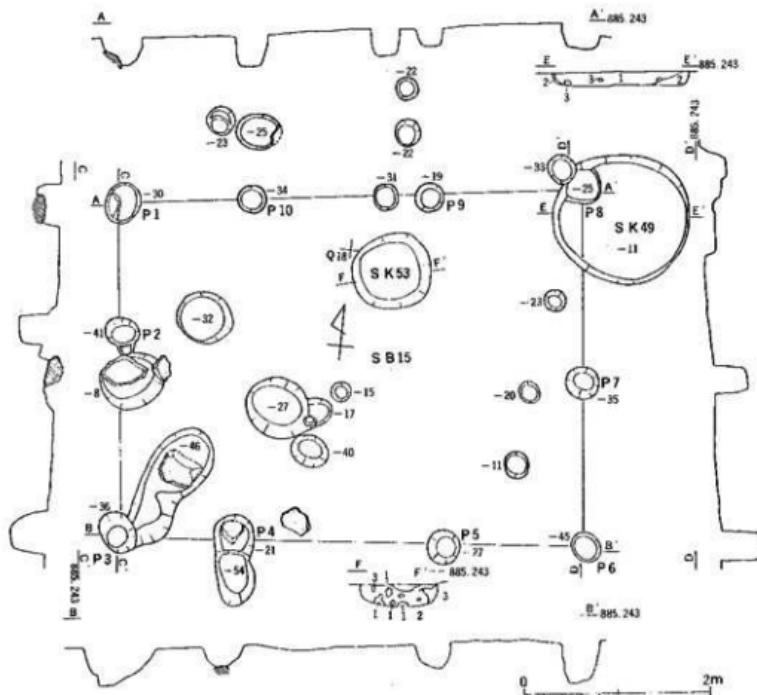
SB1 4 (第30図、図版3-1)

遺構 R18・19グリッドに位置する。東西3.6m×南北3.5m、2間×2間の掘立柱建物址であり、主軸方向はN 2° Wを示す。柱穴は8本検出された。その間隔は、P7-P8間 1.8m、P8-P9間 1.8m、P9-P10間 2.2m、P10-P11間 2.2m、P11-P12間 1.7m、P12-P13間 2.0m、P13-P14間 1.8m、P14-P7間 1.6mである。

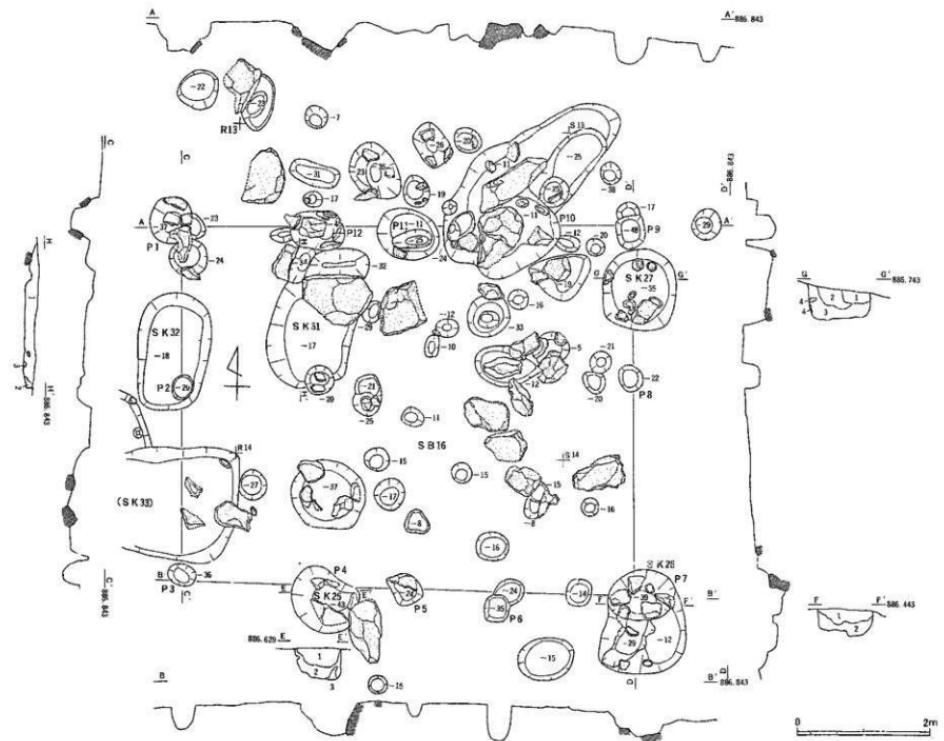
遺物 本址に伴う遺物はない。

SB1 5 (第31図、図版3-2)

遺構 P・Q17・18グリッドに位置する。東西4.9m×南北3.6m、3間×2間の掘立柱建物址であり、主軸方向はN 6° Wを示す。ピットは20本余り検出されたが、本址の柱穴は10本であろう。その間隔は、P1-P2間 1.5m、P2-P3間 2.2m、P3-P4間 1.3m、P4-P5間 2.3m、P5-P6間 1.5m、P6-P7間 1.8m、P7-P8間 2.1m、P8-P9間 1.7m、P9-P10間 2.0m、P10-P1間 1.3mである。本址にはSK4 9、SK5 3 が



第31図 SB15, SK49, SK53 (1/60)



第32図 SB16, SK25, SK26, SK27, SK31, SK32 (1/60)

重複しているが、その新旧関係は不明である。

遺物 本址に直接伴う遺物はない。

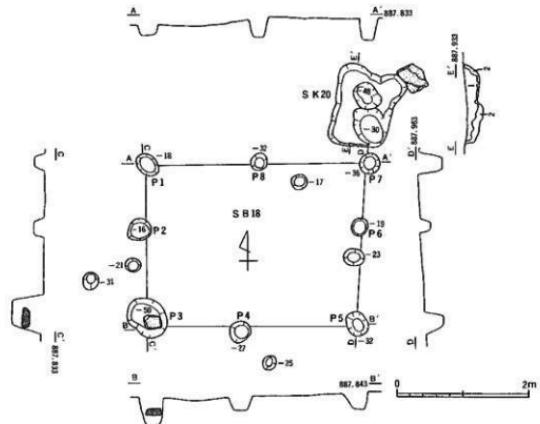
**SB1 6** (第32図、図版3-3)

遺構 Q・R・S13・14に位置する。東西7.0m×南北5.5m、4間×2間の掘立柱建物址で、主軸方向はNを示す。ピットは本址及び周辺から40本近く検出されたが、主柱穴は12本程度であろう。その間隔は、P1-P2間 2.5m, P2-P3間 2.7m, P3-P4間 3.5m, P4-P5間 1.3m, P5-P6間 1.5m, P6-P7間 2.2m, P7-P8間 3.5m, P8-P9間 2.3m, P9-P10間 1.5m, P10-P11間 1.8m, P11-P12間 1.5m, P12-P1間 2.4m, である。本址には土壙が6基(SK25, SK26, SK27, SK31, SK32, SK33)重複するが、そのうちSK25, SK26は柱穴と考えたい。

遺物 SB1 6付近から土師質土器片、内耳土器片、常滑大甕片(第49図8)が出土しており、中世の所産と考えられる。

**SB17** (第19図、図版3-4)

遺構 本址はR・S10グリッドに位置する。東西3.0m×南北3.9m、2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、主軸方向はN12°Eを示す。ピットは10本余り検出されたが、東側半分はSB05と重複するため本址に確実に伴う柱穴は9本であろう。柱穴の間隔は、P1-P2間 1.5m,



第33図 SB18, SK20 (1/60)

P2—P3間 1.5m, P3—P4間 1.9m, P4—P5間 1.9m, P5—P6間 1.5m, P6—P7間 1.5m, P7—P8間 1.5m, P8—P1間 2.4m, とほぼ一定間隔を保つ。P1, P2, P8, P9の内側にはSK06を含み、本址と切り離して考えることはできない。

遺物 本址に伴う遺物はない。

SB1 8 (第33図、図版3—5)

遺構 D9グリッドに位置する。東西3.3m×南北2.5m, 2間×2間の掘立柱建物址で、主軸方向はNを示す。柱穴は10本検出された。その間隔は、P1—P2間 1.0m, P2—P3間 1.5m, P3—P4間 1.5m, P4—P5間 1.8m, P5—P6間 1.5m, P6—P7間 1.0m, P7—P8間 1.6m, P8—P1間 1.7mである。P3内には、平板状の石が平坦面を上に向けて埋設しており、P3に伴う礫石と考えられる。

遺物 本址に伴う遺物はない。

SB1 9 (第34, 35図、図版3—6)

遺構 S17グリッドに位置する。東西2.0m×南北2.5m, 主軸方向はN6°Wを示す。1間×2間の掘立柱建物址で、SK44を内部に含むが本址と一体になさず可能性が強い。柱穴は6本検出された。その間隔は、P1—P2間 1.1m, P2—P3間 1.4m, P3—P4間 2.0m, P4—P5間 1.3m, P5—P6間 1.6m, P6—P1間 2.0mである。

遺物 P6中から上飾質土器片 (第35図) が出土しているが、SK44からは上飾器壺片が出士しており、本址の時期は判然としない。

SB2 0 (第29図、図版2—8)

遺構 T17・18グリッドに位置する。東西3.1m×南北2.0m, 2間×1間の掘立柱建物址で、主軸方向はN6°Wを示す。柱穴は8本検出された。その間隔は、P9—P10間 1.5m, P10—

P11間 1.6m, P11—P12間 2.0m, P12—P13間 1.6m, P13—P14間 1.5m, P14—P9間 2.0mであり、ほぼ一定の間隔をもつ。本址は東側でSB1 1と、南西側でSB13と重複するが、その新旧関係は全く不明である。

遺物 本址に伴う遺物はない。



第34図 SB19, SK44, SK50 (1/60)

第35図 SB19土器質土器 (1/4)

### 3 土壙(S K01～S K66)とその遺物

#### SK 0 1 (第40図)

遺構 C2グリッドに位置する。平面形は卵形を呈し、径2.4 m × 1.7 m、深さ30 cmを測る。

遺物 覆土中より縄文時代中期と思われる上器片1片が出土している。

#### SK 0 2 (第40図、図版3—7・8)

遺構 R9グリッドに位置する地下式塗である。覆土は次のとおり。1層 暗黄色土層—ローム中に径 0.5 cm程の小礫、黒色土を多く含み、しまり、粘性強い。2層 黒褐色土層—黒色土中にローム粒子が多く混入し、しまり、粘性共になし。3層 黒色土層—天井部の黒色土の崩落によるもの。4層 黄色土層—ローム中に径 0.5 cm程の小礫、地山の岩盤塊を多く含み、しまりなく粘性あり。5層 暗黄色土層—ローム中に黒色粒子を多く含む。4層よりも小礫が多く、しまりなし。6層 黑褐色土層—ローム粒子、ロームブロックを多く含み、しまりなく粘性がある。7層 黄色土層—ローム層。8層 黒色土層—混入物の少ない黒色土で、粘性は強く、しまりなし。9層 茶褐色土層—10層の漸移層、ローム粒子を多く含んだ黒色土で、粘性、しまり共になし。10層 暗黄色土層—黒色土が均質に混入したローム層で、しまり、粘性共にあり。この中で1層の堆積は不自然で、人為的行為によるものと思われる。堅壁部は径 1.0 m × 1.0 m、深さ1.2 mを測り、地下室との間に約25 cmのレベル差をもつ。地下室はローム質の岩盤層に形成され、堅壁に対して長軸が横に接続する。その平面形は1.9 m × 1.2 mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はE32° Nを示す。床面は平坦でなく、南西壁下はピット状に窪む。

遺物 遺物は流れ込みによる縄文前期上器片1片以外はない。

#### SK 0 3 (第40図、図版4—1・2)

遺構 T10グリッドに位置する地下式塗である。遺構の層序は次のとおり。1層 黒色土層—ローム粒子をやや多く含み、粘性はあるが、しまりなし。2層 茶褐色土層—黒色土とロームの混合土で、径 2 cm程の小礫を多く含み、しまり、粘性共にあり。3層 黄色土層—ローム層。地下室天井部の崩落したものである。4層 黒色土層—小礫、ロームブロックを少暈含み、しまりなく粘性強い。5層 黑褐色土層—小礫等を含む。6層 黑色土層—4層とはほぼ同じ。7層 暗黃褐色土層—ロームブロックと黒色土の混合土で、しまりなく粘性あり。8層 茶褐色土層—粘土質のブロックで非常に硬い。9層 黑色土層—ローム粒子量がやや多く、しまりなく粘性あり。10層 黄色土層—3層とはほぼ同じローム層である。11層 黑色土層—ロームブロックを多く含み、4層とはほぼ同じ。堅壁部は径1.0 m × 1.1 m、深さ1.2 mを測り、地下室との間に約10 cmのレベル差をもつ。堅壁部中位で地下室入口部には巨石が2個流れ込んでいるが、人為的か否かは判断できないものの、地下室の閉塞石の可能性が強い。地下室は1.1 m × 1.3 mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN44° Wを示す。床面から天井部までの高さは現状では約90 cmを測る。室内はほぼ完全に土砂の流れ込みによって埋没する。床面はほぼ平らである。

遺物 遺物はない。

SK04 (第40図)

遺構 R10グリッドに位置し、径0.8m×0.8m、深さ42cmの円形を呈す。覆土は、1層 黒色土層-小礫（径0.5～1.0cm）を多く含み、しまりはあるが粘性は弱い。2層 黒褐色土層-小礫、ローム粒子を含み、しまり、粘性あり。

遺物 遺物はない。

SK05 (第19図、図版3-4)

遺構 R10グリッドに位置し、SB05、SB17と重複して検出された。覆土は次のとおり。1層 暗茶褐色土層-粒子の細かい黒色土。ローム粒子を少量含み、しまり、粘性なし。2層 黒褐色土層-ローム粒子、ロームブロック（径0.5～3cm程）、小礫（径0.5cm程）を多量に含み、しまり、粘性なし。3層 黒褐色土層 1層中にロームブロック（径0.5～4cm程）を多く含んだ層。しまりなし。4層 SB05の床面に堆積したローム層である。セクションではSB05との覆土の切り合いはみられないが、3層の堆積状況からSK05の方が新しいと思われる。平面形は1.7m×1.2m、深さ45cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はN 6° Eを示す。

遺物 遺物はない。

SK06 (第40図、図版4-6)

遺構 R9グリッドに位置する地下式塙である。覆土は次のとおり。1層 茶褐色土層-ローム粒子、礫（径2～10cm）を多く含み、しまりはあるが粘性はない。2層 黑褐色土層-褐色土塊、小礫を多く含み、しまり強く粘性あり。3層 黄褐色土層-ロームと黒色土の混合土で、小礫、礫を多く含み、しまり強く粘性あり。4層 黑褐色土層-黒色土中にロームが混入した層で、小礫が多くしまりがないが粘性あり。5層 黄色土層-堅体ロームの崩土。6層 黑色土層-小礫、炭化物が少量含まれ、しまり、粘性共に強い。7層 暗茶褐色土層-1層に近く、しまり、粘性共に強い。堅塙部の径は不明であるが、深さは1.4mを測る。堅塙底面と地下室床面は段差なく平らに続く。地下室は2.0m×1.4mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はE 20° S、SK02、03同様、長軸が堅塙部に対し横に接続する。天井部は完全に崩落する。壁面には不明瞭ではあるが、工具痕が確認された。

遺物 遺物は全くない。

SK07 (第19、37図、図版4-4・5)

遺構 S11グリッドに位置する。長軸2.0m×短軸0.9mの長方形を呈し、深さ45cm、主軸方向はE 1° Sを示す。覆土は、1層 黑褐色土層-ロームブロック（径0.5～2.0cm）を全体に含み、しまり弱く粘性あり。2層 茶褐色土層-ローム粒子を多く含んだ黒色土で、堅体と同質である。床下20cmから礫（径25cm）と共に、完形の土師質土器が出土した。本址は、その形態から木棺を埋葬した墓塙と思われ、土師質土器は副葬品であろう。

遺物 出土した土師質土器(第37図2)は、口径7.7cmで内側にスス(?)が付着しており、

灯明皿として使用されたと思われる。中世の所産である。

**SK 0 8 (第38, 41図, 図版4—6~8)**

遺構 R・S9グリッドに位置する。平面形態は地下式壇と類似し、1.8m×1.1mの方形の掘り込みであり、主軸方向はN3°Wを示す。覆土は、1層 黄褐色土層一小礫、礫からなる集石を含み、しまり、粘性共になし。2層 黒色土層一小礫を多く含み、粘性、しまり共に強い。3層 黑色土層一小礫を少量含み、しまりは強い。1層中の集石は、礫の数が総数約570個、総重量約1783kgをはかる。

遺物 集石の礫に混じって石臼片(第38図1)が出土した。打込み挽手形態の上臼、約1/4の破片である。分画数は不明だが、表面には副溝が8溝みられる。また覆土中に土師質土器片、内耳土器片が數片出土しており、また3層中からは底面から20cm浮いて鉄製品と思われる遺物が1点出土した。土壤、集石共に中世の所産と思われる。

**SK 0 9 (第41図)**

遺構 Q7グリッドに位置する。1.2m×1.5mの不整円形を呈し、深さは12cmを測る。覆土は、1層 黑褐色土層一小礫、ローム粒子を少量含み、しまり、粘性共に弱い。

遺物 遺物はない。

**SK 1 0 (第19, 41図, 図版5—1・2)**

遺構 S10グリッドに位置し、SB05, SK11と重複している。本址とSK11の覆土は次のとおり。1層 赤褐色土層—SB05のカマド部のものと思われる焼土を含む。2層 黑褐色土層一小礫、大石を含み、しまりなく粘性あり。3層 茶褐色土層—ローム粒子、小礫、スコリア、黒色土ブロックを多く含み、しまりはあるが粘性は弱い。4層 茶褐色土層—ロームブロック(径0.5~2.0cm)、炭化物、スコリア、黒色土ブロックを多く含み、しまりはあるが粘性は弱い。5層 茶褐色土層—4層に近いが、4層よりもローム粒子の量が少なくしまり強い。6層 黄褐色土層—ロームと茶褐色土が混合したもので、ローム粒子の量が多い。セクションの切り合いでSK10はSK11よりも新しい。長軸2.0m×短軸1.4mの隅丸長方形を呈し、深さは35cm、主軸方向はE6°Nを示す。床面にはピットが1本検出された。

遺物 覆土中からSB05の土師器片と共に土師質土器片、内耳土器片が出土しており、中世の所産と考えられる。

**SK 1 1 (第19, 41図, 図版5—1・2)**

遺構 S10グリッドに位置し、SB05, SK10と重複する。覆土はSK10を参照。SB05, SK10よりも新しい。長軸1.9m×短軸1.5mの隅丸長方形を呈し、深さ40cm、主軸方向はE6°Nを示す。

遺物 覆土中から外面にススの付着した中世の甕口縁部が出土している。

**SK 1 2 (第41図)**

遺構 Q・R8・9グリッドに位置する。径1.7m×1.5m、覆土には80~90cm大の巨石3個を

含む礫が含まれ、充填は不可能であったが、深さは約55 cmであろう。

遺物 本址に伴う遺物ではなく、水田造成に伴う近年の遺構とも考えられる。

SK13 (第39、40図、図版4-1・2、5-3・4)

遺構 T10グリッド、SK03脇に位置する。1.0 m × 1.2 m の不整円形を呈し、深さ40 cm。覆土中には20~40 cmの石8個による配石がある。覆土は、小礫を含みしまりがある茶褐色土である。

遺物 底面から5 cm程浮いて、中国銭6枚（第39図1~6、開元通宝1、熙寧元年1、元豐通宝1、紹聖元年1、永樂通宝2）が3枚づつ重なって出土した。また覆土に混じて手斧による削り屑と思われる木片が5片程度検出された。本址は永樂通宝の出土から1408年以降の墓壙であると思われる。

SK14 (第41図)

遺構 C5グリッドに位置し、1.0 m × 0.9 m、深さ15 cmの不整円形を呈する。覆土は、1層 黒褐色土層・炭化物を非常に多く含み、ローム粒子、ロームブロックもみられる。2層 黄褐色土層・ローム粒子の多い層で、しまり、粘性共に強い。

遺物 遺物はない。

SK15 (第41図)

遺構 B4グリッドに位置し、1.3 m × 1.5 m、深さ5 cmの不整円形を呈す。覆土は、ローム粒子、ロームブロック、焼土、炭化物を含む茶褐色土層で、床面からやや浮いて狭い範囲で焼土の堆積がみられた。

遺物 遺物はない。

SK16 (第41図、図版5-5)

遺構 B10グリッドに位置する。長軸1.3 m × 短軸0.55 m、深さ50 cmの長楕円形を呈し、主軸方向はE18° Nを示す。覆土は、1層 黒色土層・繩文土器片を混入し、粘性、しまり共に弱い。2層 黑褐色土層・ローム粒子を含み、粘性、しまり共に強い。2層中には底面から約20 cm浮いて、径約30 cmの石1個が検出された。

遺物 遺物には流れ込みと思われる繩文土器片があるが本址との関係は不明である。

SK19 (第41図)

遺構 B1グリッドに位置する。1.0 m × 1.0 mの不整円形を呈し、深さは約7 cmを測る。覆土は、1層 黑褐色土層・小礫、ロームブロックを少量含み、しまりあるが粘性弱い。2層 暗黄褐色土層・ロームブロック、ローム粒子を多く含み、しまりあるが粘性弱い。床面は凹凸激しく軟弱である。

遺物 遺物はない。

SK20 (第33図)

遺構 D8グリッド、SB18北側に位置する。1.1 × 0.8 m、深さ22 cmの不整長方形を呈す。覆土は、1層 黑褐色土層・ロームブロック、小礫を少量含み、しまりあるが粘性弱い。2層

暗黄褐色土層—ローム粒子、ロームブロックを多く含む黒褐色土層。しまりあるが粘性弱い。

遺物 遺物はない。

SK21 (第41図)

遺構 F10グリッドに位置する。1.10 m×0.8 mの不整形を呈し、深さ20 cmを削る。覆土は、1層 黒褐色土層—ローム粒子、ロームブロック、小礫を少量含み、しまり、粘性あり。2層 黄褐色土層—小礫を少量含むローム。

遺物 遺物はない。

SK22 (第41図)

遺構 E9グリッドに位置し、1.6 m×0.8 m、深さ10 cmの不整形を呈す。覆土は、1層 黑褐色土層—小礫、ローム粒子を含み、しまり、粘性あり。2層 黄褐色土層—ローム。底面には数個の巨石が露出する。

遺物 遺物は1層から平板状の石が出上しており、台石として使用されたと思われるが、その時期は不明。

SK23 (第41図)

遺構 F8グリッドに位置し、1.1 m×0.9 m、深さ25 cmの梢円形を呈す。覆土は、ローム塊を多量に含み硬くしまった砂質の褐色土で、炭化物も多い。粘性は全くない。覆土中からは割石が多数出土し、底面には割石を剥いた巨石が露呈する。

遺物 遺物は全くない。

SK24 (第36、41図、図版5—6、10—1)

遺構 C・D9グリッドに位置し、径2.0 m×1.8 m、深さ85 cmの円形を呈す。覆土は粘性のある黒色土が充満し、底面から約45 cm程浮いて10~50 cm大の石10個近くからなる集石が検出された。

遺物 覆土中から縄文時代中期末~後期中頃の土器片(第36図1~6)が数片出土した。1は加曾利EIV式の深鉢形土器口縁部で、口縁付近に把手をもつと思われるが欠失しており、その形状は不明である。胴部には縄文を施した区画があり、その区画外には赤色塗彩がみられる。2は壠ノ内式土器であり、5、6はその同一個体と思われる。

SK25 (第32図)

遺構 R14グリッドに位置する。SB16と重複し、その柱穴と考えられる。径1.0 m×1.0 m、深さ45 cmの不整円形を呈す。覆土は次のとおり。1層 黑褐色土層—ローム粒子、小礫、礫を含み、しまり、粘性あり。2層 黑褐色土層—ローム粒子、ロームブロックを多く含み、しまり粘性あり。3層 黄褐色土層—ローム。

遺物 遺物はない。

SK26 (第32図)

遺構 S14グリッドに位置する。SB16のピットと重複し、柱穴を含む土塽と考えられる。

1.2 m × 1.6 m, 深さ40 cmの楕円形を呈す。覆土は、1層 黒褐色土層—ロームブロック、ローム粒子小礫を少量含み、しまり、粘性共にあり。2層 黒褐色土層—ロームブロック、ローム粒子を多く含む。しまり弱く、粘性あり。

遺物 遺物はない。

#### SK27 (第32図)

遺構 SB13グリッドに位置し、SB16と重複するが、その柱穴とも考えられる。1.1 m × 1.2 m, 深さ55 cmの円形を呈す。覆土は次のとおり。1層 黒褐色土層—ローム粒子を全体に含む。小礫、スコリアを少量含み、しまり粘性共にあり。2層 黒色土層—ロームブロック、小礫を少量含み、しまり、粘性共にあり。3層 黑褐色土層—ロームブロックの量多く、小礫、スコリアを少量含み、しまり、粘性共に強い。4層 黄色土層—壁体崩土のローム。

遺物 遺物はない。

#### SK28 (第21図)

遺構 R15グリッドに位置し、SB07の西壁を切って重複する。また東側は土壤に切られる。1.1 m × 0.6 m, 深さ25 cmあり、楕円形を呈す。覆土は、1層 黑色土層—小礫、ローム粒子を含み、しまり弱く粘性あり。2層 黄褐色土層—ローム中に黑色土ブロック、小礫を混入し、しまり粘性共にあり。

遺物 遺物はない。

#### SK29 (第21図)

遺構 R15グリッド、SB07内に位置する。1.0 m × 1.3 m, 深さ20 cmの楕円形を呈す。覆土は、1層 黑色土層—ローム粒子、ロームブロックを少量含み、しまり弱く、粘性あり。2層 茶褐色土層—ローム粒子、ロームブロックを多く含み、黑色土も混入。しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はなく、SB07との関係は不明。

#### SK30 (第41図)

遺構 T13グリッドに位置し、1.5 m × 1.4 m, 深さ25 cmの円形を呈す。覆土は、ローム粒子、ロームブロック、スコリアを多く含んだ黑色土層で、しまり、粘性共に強い。

遺物 遺物はない。

#### SK31 (第32図)

遺構 R13グリッド、SB16内に位置し、1.3 m × 1.7 m, 深さ15 cmの隅丸長方形を呈す。覆土は、1層 黑褐色土層—ロームブロックを多量に含み、しまり、粘性共にあり。炭化物、スコリア、礫を少量含む。2層 黄褐色土層—1層とロームの混合土で、しまり弱い。3層 黄色土層—ローム。

遺物 遺物はなく、SB16との関係は不明。

#### SK32 (第32図)

遺構 Q13グリッドに位置し、SB16と重複する。1.1 m × 1.75 m, 深さ18 cmの隅丸長方形を

呈し、主軸方向はN 6° Eを示す。覆土は、ロームブロックを多く含む黒褐色土層であり、底面にはSB16のピットがみられる。

遺物 遺物はない。

SK33 (第42図)

遺構 Q14グリッドに位置し、SB16、SK40と重複する。2.1 m × 1.7 m、深さ20 cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はE 3° Nを示す。覆土は、1層 黒褐色土層—ロームブロックをやや多く含み、しまり、粘性共にあり。炭化物を少量含む。2層 黄褐色土層—ローム粒子を多く含み、しまり、粘性共にあり。

遺物 覆土中からは土師器壺片、須恵器坏片が出土した。

SK34 (第42図)

遺構 Q14グリッドに位置し、SK37(中世)の東壁を切る。1.6 m × 1.1 m、深さ35 cmの楕円形を呈す。覆土は、1層 黄褐色土層—ローム粒子、ロームブロックと黒色土の混合土で、小礫、炭化物を含み、しまり、粘性あり。2層 黄褐色土層—ローム質の褐色土で、しまり、粘性あり。埋め戻しを伴う土塗である。

遺物 遺物はない。

SK35 (第25図、図版2-5)

遺構 P13グリッドに位置し、SB09、SK36と重複する。1.3 m × 1.7 m、深さ10 cmの楕円形を呈す。覆土はSB09を参照。セクションからSB09よりは古いが、SK37との前後関係は不明。

遺物 遺物はない。

SK36 (第25図、図版2-5)

遺構 P・Q13グリッドに位置し、SB09、SK35と重複する。1.9 m × 1.2 m、深さ18 cmの楕円形を呈す。重複関係についてはSK35を参照。

遺物 遺物はない。

SK37 (第37、38、42図、図版5-7)

遺構 Q14グリッドに位置し、SK34、SK38と重複する。2.2 m × 1.2 m、深さ15 cmの長楕円形を呈し、主軸方向はN 2° Eを示す。覆土は、1層 黒褐色土層—ロームブロックを多く含み、しまり、粘性共にあり。2層 黄色土層—ロームを多量に含む。

遺物 底面と接して石臼片(第38図2)が出土した。6分画、5~7溝をもつ、打込み挽手形態の上臼の破片で、中央から1/2に割れている。推定直径31 cm、赤褐色の溶岩質である。覆土中からは土師質土器片(第37図3、4)が出土している。石臼と土師質土器による確定な年代決定は難しいが、-~応中世以降としておきたい。

SK38 (第42図、図版5-8)

遺構 Q14グリッドに位置し、SK37と重複する。2.0 m × 1.3 m、深さ25 cmの隅丸長方形を呈

し、主軸方向はE8° Sを示す。覆土は、1層 黒褐色土層一ローム粒子、ローム塊を含み、粘性はあるがしまり弱い。炭化物が含まれる。2層 黄褐色土層一ローム粒子を非常に多く含み、しまり、粘性共にあり。3層 黄色土層一ローム。1層中にはコの字形に組んだ配石がみられ、その中央部には5~20cm大の礫による集石がみられた。

遺物 覆土中から土師質土器片が出土した。本址はSB16に伴うなんらかの施設と考えたい。

#### SK39 (第42図)

遺構 Q14グリッドに位置し、SK38と重複する。1.0m×0.8m、深さ25cmの梢円形を呈す。覆土は1層 黒色土層一ローム粒子、礫を少量含み、しまり、粘性共にあり。2層 黄褐色土層一ローム粒子、ローム塊を多く含み、しまり、粘性あり。

遺物 遺物はない。

#### SK40 (第42図)

遺構 Q13・14グリッドに位置し、SK33と重複する。1.4m×2.5m、深さ10cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はE3° Nを示す。

遺物 遺物はない。

#### SK41 (第29, 37図)

遺構 T17グリッドに位置し、2.0m×1.4m、深さ27cmの不整円形を呈す。覆土は、1層 黒色土層一小礫をやや多く含み、ロームブロック、炭化物も少量含まれる。2層 黄褐色土層一ロームを非常に多く含む。底は硬くしまっている。

遺物 覆土中から土師器甕片と共に土師質土器片(第37図5)が出土しており、中世の所産と考えられる。

#### SK42 (第42図)

遺構 R17・18グリッドに位置し、SK43と重複する。4.0m×2.0m、深さ30cmの不整形を呈し、2基の土壙からなると思われる。覆土は次のとおり。1層 黒褐色土層一ローム粒子を含み、しまり粘性共にあり。炭化物を含む。2層 黑褐色土層一ローム粒子、ロームブロック、小礫を多く含み、しまり、粘性共にあり。炭化物、スコリアを含む。3層 黄褐色土層一ロームブロック、ローム粒子を多く含み、しまり弱く粘性あり。4層 黄色土層一ロームブロック。5層 暗褐色土層—2層に近いが、2層よりもローム量が少ない。

遺物 遺物はない。

#### SK43 (第42図)

遺構 Q・R17・18グリッドに位置し、SK42と重複する。4.2m×1.7m、深さ10cmの不整形を呈し、平面形から2基の土壙からなると思われる。覆土は、1層 黑褐色土層一小礫、ロームブロック、炭化物を多く含み、しまり、粘性共にあり。2層 黄色土層一ローム。3層 暗褐色土層一スコリア、炭化物を少量含み、粘性、しまり共に強い。

遺物 遺物はない。

SK44 (第34、37図、図版3-6)

遺構 S17グリッド、SB19内に位置する。長軸2.8 m×短軸1.6 m、深さ25 cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN6°Wを示す。覆土は、1層 黒褐色土層-スコリア、炭化物、小礫多く、しまり粘性共に強い。2層 黄褐色土層-ロームを多く含む。3層 黄色土層-ローム。本址はSB19に関わる施設と思われる。

遺物 遺物は土師器斐片（第37図1）が出土している。

SK45 (第43図、図版6-1)

遺構 R・S17・18グリッドに位置し、SK46と重複する。1.7 m×1.3 m、深さ25 cmの楕円形を呈す。覆土は1層 黒色土層-ローム粒子を含み、しまり弱く粘性あり。スコリア、炭化物を少量含む。2層 黑褐色土層-1層に近いが、スコリア、炭化物は含まれない。3層 黄褐色土層-ロームと黒色土の混合土で、しまり、粘性あり。

遺物 遺物は1層中から土師質土器片（第37図6）、内耳土器片（第37図7）が出土している。SK46との関係は不明。

SK46 (第43図、図版6-1)

遺構 R・S18グリッドに位置し、SK45と重複する。1.8 m×1.0 m、深さ30 cmの楕円形を呈す。覆土は1層 黒色土層-スコリア、小礫をやや多く混入し、しまり、粘性共にあり。1層2層のブロックを多く含む1層。2層 黄褐色土層-ロームブロック。3層 黄色土層-黒色土を混入するローム。本址は埋め戻しを伴う土壌と思われる。

遺物 遺物は、内耳土器片と、中～近世の陶器片が出土している。

SK47 (第43図、図版6-1)

遺構 R・S18グリッドに位置し、1.5 m×1.2 m、深さ25 cmの楕円形を呈す。覆土は、1層 黒色土層-小礫、ローム粒子を少量含み、しまり弱く粘性あり。2層 黑褐色土層-スコリア、ローム粒子を少量含み、粘性、しまり共に強い。3層 茶褐色土層-ローム粒子を全体的に含み、粘性しまり共に強い。4層 黄色土層-スコリア、黒色土を混入するロームで、粘性、しまり共にあり。

遺物 1層中から、内耳土器片が出土している。

SK48 (第42図)

遺構 Q・R18グリッドに位置し、1.6 m×1.5 m、深さ15 cmの不整円形を呈す。覆土は、ロームブロック、ローム粒子、小礫を多く含む黒色土層で、しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はない。

SK49 (第31、37図)

遺構 Q17グリッドに位置し、SB15のピットと重複する。1.4 m×1.4 m、深さ15 cmの円形を呈す。覆土は、1層 黒色土層-ローム粒子、ローム塊をやや多く含み、小礫が混入する。2層 茶褐色土層-粒子が細かく、スコリア、炭化物を少量含む。3層 黄色土層-ローム塊。

遺物 覆土中から内耳土器片（第37図8）が出土し、中世の所産と思われる。

SK50（第34図）

遺構 R・S16・17グリッドに位置し、0.9m×0.65m、深さ20cmの楕円形を呈す。覆土は、1層 黒褐色土層—スコリア、炭化物が多く含まれ、粘性、しまり共にあり。2層 茶褐色土層—ローム粒子、ローム塊、スコリアを含む。

遺物 遺物はない。

SK52（第36、43図）

遺構 Q・R18グリッドに位置し、2基の浅い円形の土壤と重複する。1.3m×0.9m、深さ55cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN9°Wを示す。覆土は、1層 黒褐色土層—2層に近いが、ローム粒子、小礫がやや少ない。2層 黒褐色土層—小礫（径0.1~0.5cm）、ローム粒子、ロームブロックを多く含み、しまり弱く、粘性強い。1層中には径50cm程の大石が1個含まれる。

遺物 遺物は、御文中期末（曾利V式）土器片（第36図7）と共に内面黒色土器坏片、土師器壺片が出土し、平安時代の所産と思われる。

SK53（第31図）

遺構 Q18グリッド、SB15内に位置する。0.8m×0.8m、深さ25cmの円形を呈す。覆土は、1層 黒褐色土層—小礫、スコリアを少量含み、しまり強く、粘性あり。2層 茶褐色土層—ローム粒子を少量含み、しまり、粘性共に強い。3層 黄褐色土層—ロームブロック。

遺物 遺物はない。

SK54（第45図、図版6-2）

遺構 N17グリッドに位置し、1.0m×0.9m、深さ20cmの円形を呈す。覆土は、1層 黒色土層—ローム粒子、スコリア、小礫を少量含み、しまり、粘性共にあり。2層 黄褐色土層—1層と地山の混合土で、しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はない。

SK55（第45図、図版6-2）

遺構 M17グリッドに位置し、SD01と重複する。0.7m×0.9m、深さ25cmの楕円形を呈す。覆土は1層 黒色土層—白色砂粒、スコリア、小礫を少量含み、粘性、しまり共にあり。2層 黑褐色土層—1層と3層の混合土で、ロームブロックをやや多く含み、しまり弱く、粘性強い。3層 黄色土層—ローム塊。

遺物 遺物はない。SD01との関係は不明である。

SK56（第43図、図版6-3）

遺構 M6・7グリッドに位置する。1.0m×0.5m、深さ20cmの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN19°Wを示す。覆土は、1層 黑褐色土層—ローム粒子を全体的に含み、非常に硬くしまる。炭化物が少量含まれる。2層 茶褐色土層—ロームを多く含み、しまり、粘性共にあり。

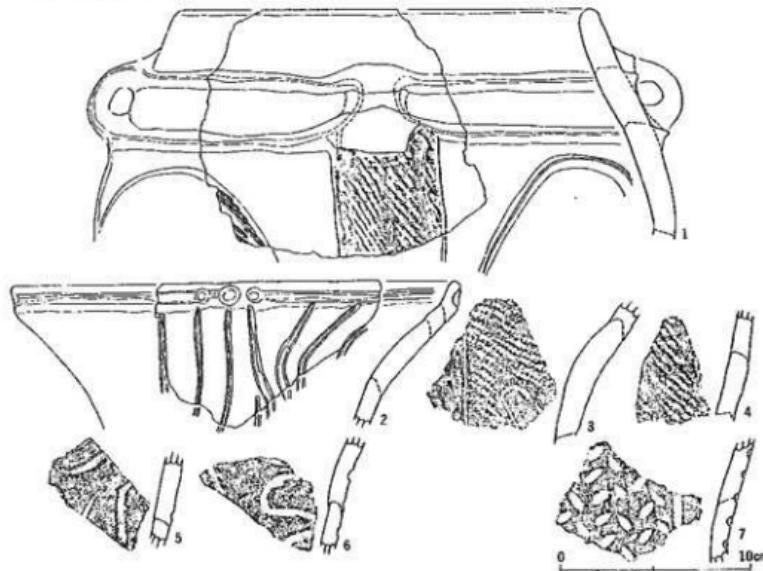
底面直上に径30 cm程の石がみられる。

遺物 遺物はない。

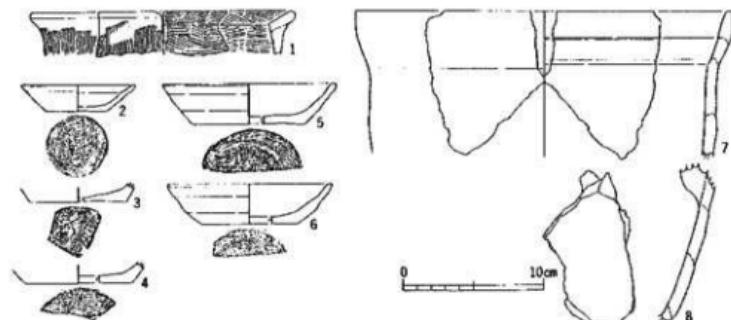
SK57 (第43図)

遺構 M7グリッドに位置し、0.6 m × 0.6 m、深さ20 cmの円形を呈す。覆土は、1層 黒褐色土層-ローム塊、ローム粒子を多く含み、しまり、粘性共にあり。2層 黄褐色土層-ローム質で、しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はない。



第36図 土塹出土 繩文土器 (1/3, 1~6はSK24, 7はSK52)



第37図 土塹出土 平安～中世の遺物 (1/4, 1はSK44, 2はSK07, 3,4はSK37, 5はSK41, 6,7はSK45, 8はSK49)

SK58 (第43図)

遺構 M6・7グリッドに位置し、 $0.6\text{ m} \times 1.0\text{ m}$ 、深さ30 cmの不整形を呈す。覆土は、ローム粒子、小礫(0.1~0.5 cm)を多く含む黒褐色土層で、しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はない。

SK59 (第43図)

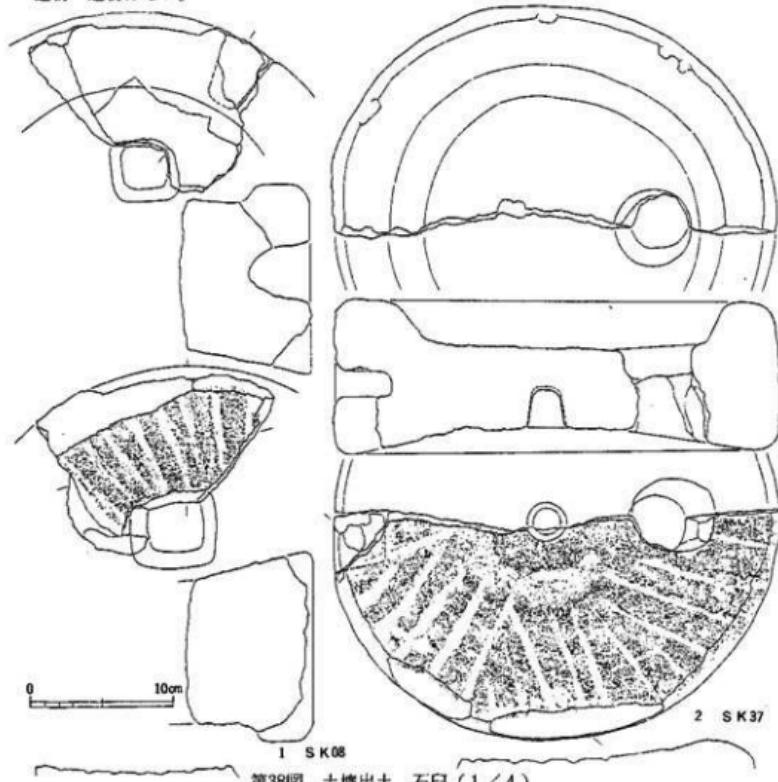
遺構 L2グリッド、SK58横に位置する。 $0.8\text{ m} \times 1.1\text{ m}$ 、深さ15 cmの不整形を呈す。覆土は、ローム粒子、ロームブロック、小礫を含む黒褐色土層で、しまり、粘性共にあり。

遺物 遺物はない。

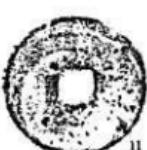
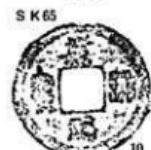
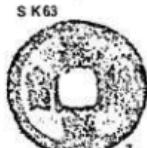
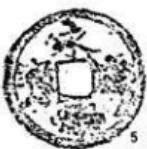
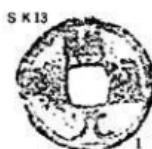
SK60 (第43図)

遺構 N2グリッドに位置する。 $1.8\text{ m} \times 0.6\text{ m}$ 、深さ15 cmの隅丸長方形を呈す、主軸方向はN $17^\circ$ Wを示す。覆土は、小礫、ローム粒子を多く含む黒褐色土層で、しまり、粘性共に弱い。

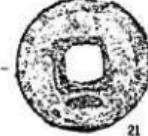
遺物 遺物はない。



第38図 土壌出土 石臼 (1/4)



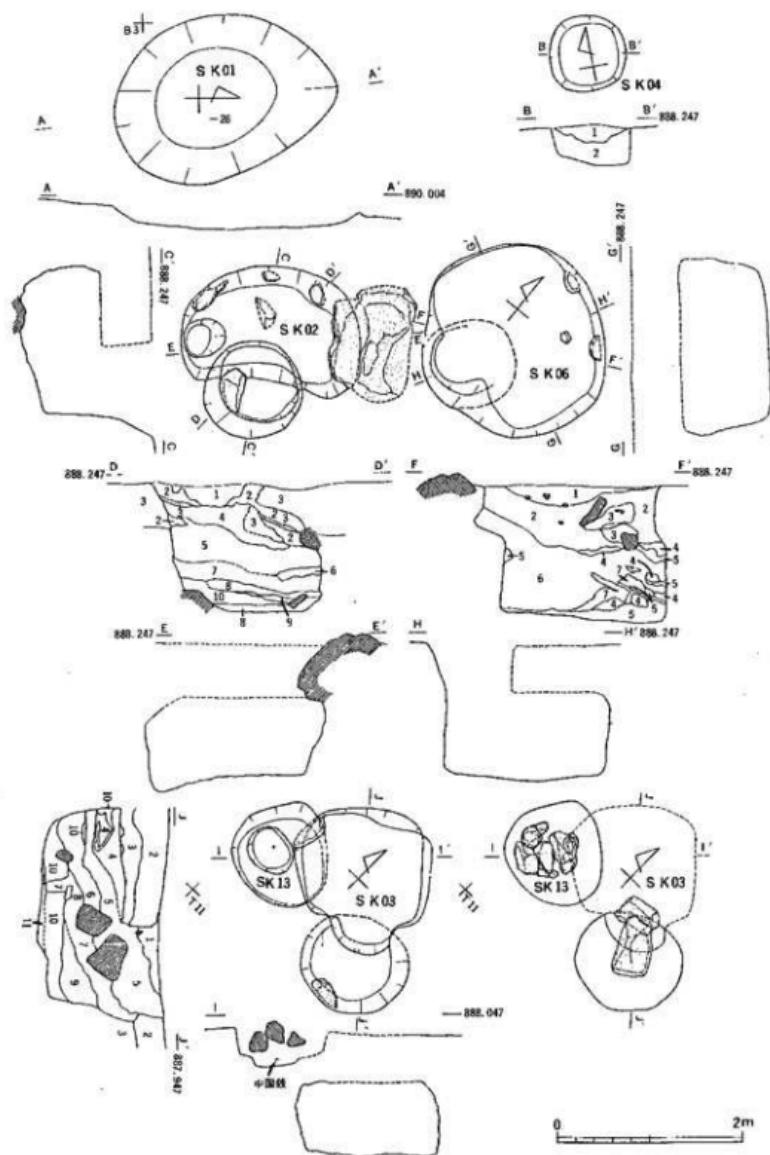
U18グリッド



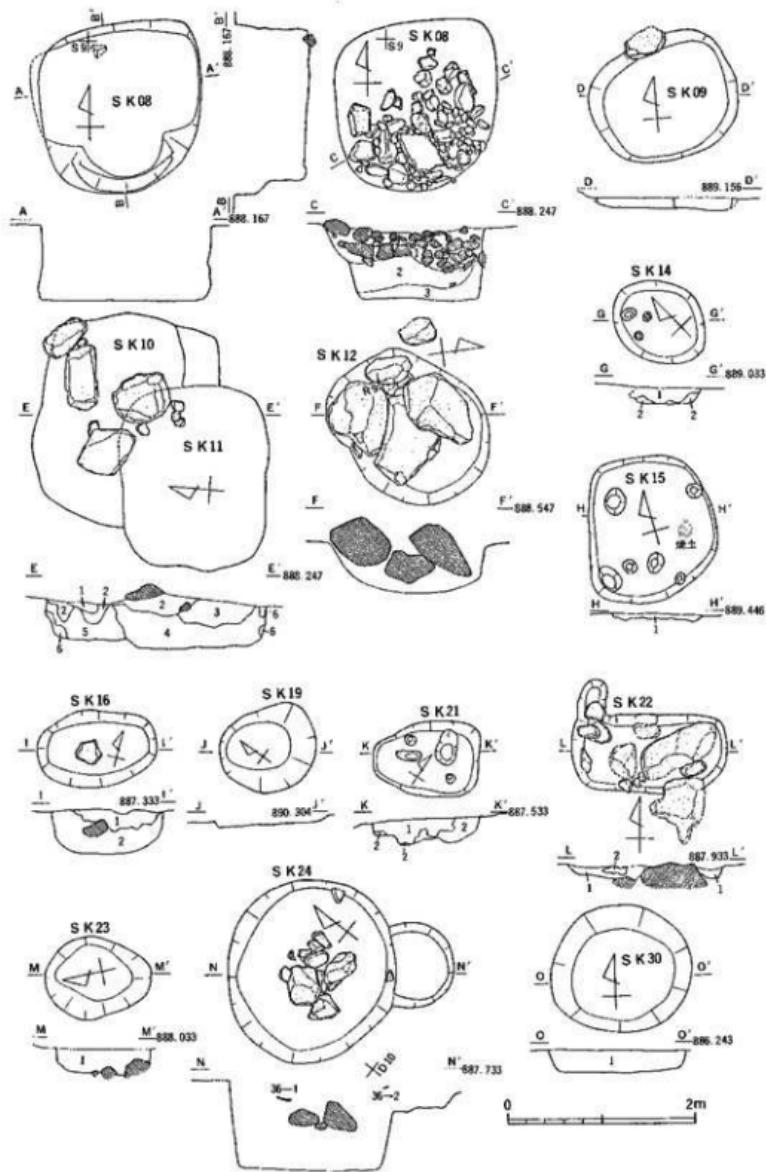
表様



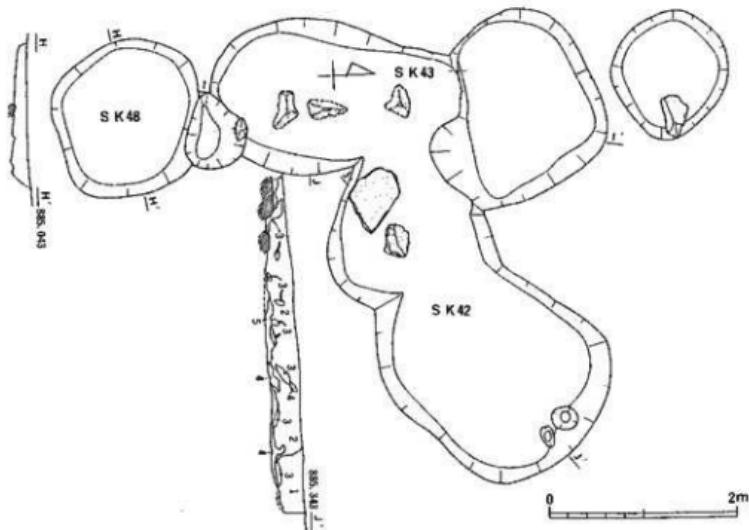
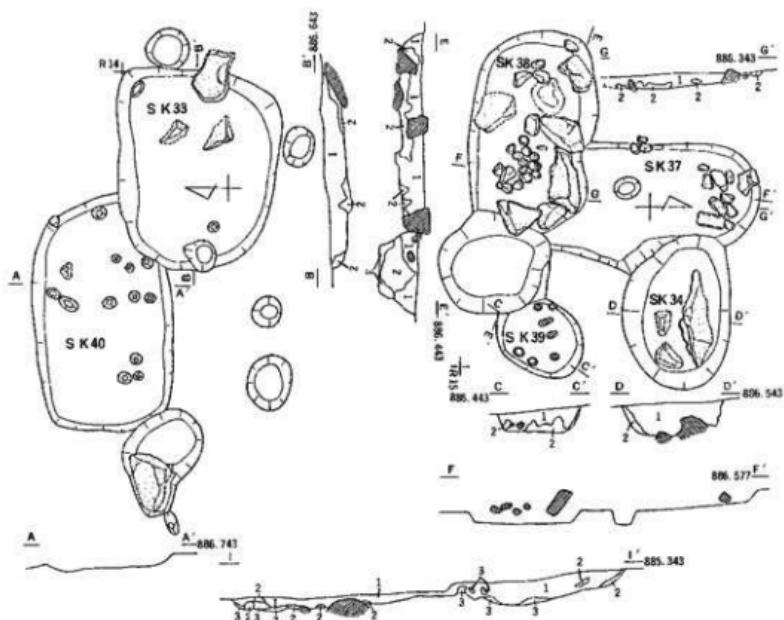
第39図 遺構及び遺構外出土 中國銭 (1 / 1)



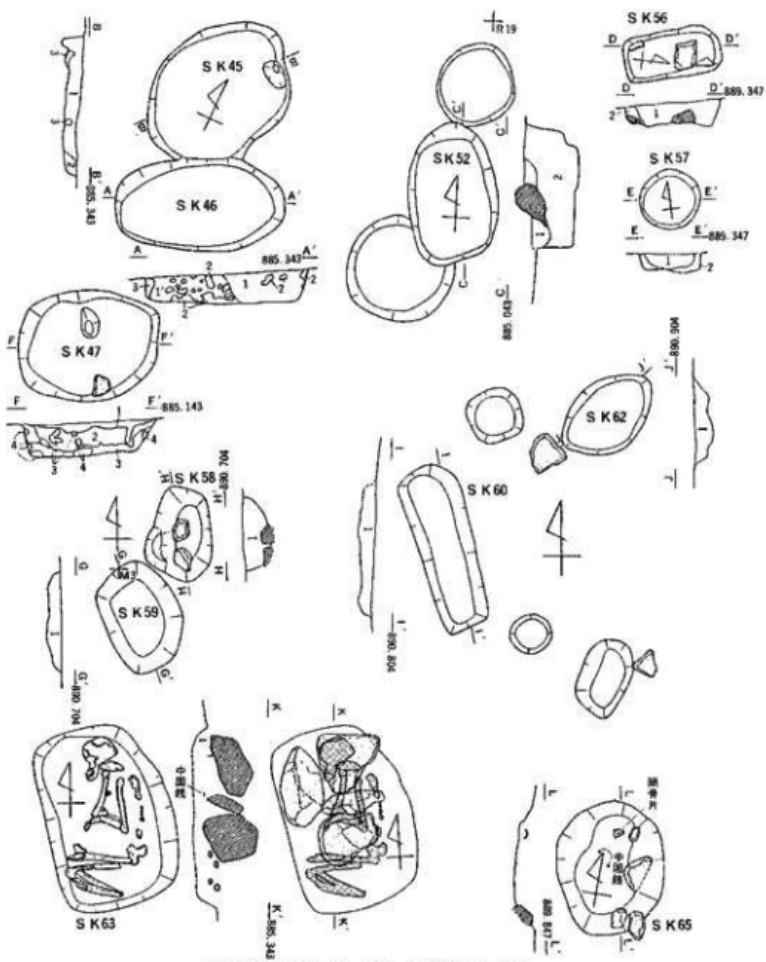
第40図 土壌 (1/60)



第41図 上巻 (1 / 60)



第42図 土壌 (1/60)



第43図 土壌 (1/60, SK63は1/30)

**SK62 (第43図)**

遺構 N2グリッドに位置し、1.1m×0.7m、深さ20cmの楕円形を呈す。覆土は、小礫を含み、  
しまり、粘性共に弱い黒色土層である。

遺物 遺物はない。

**SK63 (第27, 39, 43図、図版6-4~7)**

遺構 U18・19グリッドに位置する。1.0m×0.65m、深さ10cmの隅丸長方形を呈し、40cm大

の大石4個の下から人骨が出土した。大石は人骨の頭部、胸部、腹部の直上を被っている。人骨は北枕西向きの屈葬成人骨であり、頭位方向はN14°Wを示す。頭骨は前頭部が陥没し、後頭部が欠失する。風化が部分的に著しく、全体的に脆弱であるが、残存状況は比較的良好である。

遺物 右土胸骨上部から中国銭3枚（第39図皇宋通宝1、熙寧元宝1、永樂通宝1）が重なって出土した。埋葬年代は、永樂通宝の鋳造年代から1408年以降であることは確かである。

#### SK6 4 (第27図)

遺構 U・V18・19グリッドに位置し、SB10と重複する。1.7m×1.2m、深さ20cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はN31°Wを示す。覆土はSB10を参照。セクションから本址はSB10よりも新しい。

遺物 遺物はない。

#### SK6 5 (第39、43図、図版6-8)

遺構 Q5・6グリッドに位置する。1.4m×1.1m、深さ20cmの楕円形を呈し、人骨の頭骨片を出土した。頭位方向はN2°Eを示す。

遺物 底面直上からは中国銭が6枚（第39図嘉祐通宝1、治平元宝1、元豐通宝2、聖宋元寶1、洪武通宝1）が3枚づつ重なって出土した。本址は、洪武通宝の出土から1368年以降の六道銭を伴う墓擴である。

#### SK6 6 (第21図、図版2-4)

遺構 R・S15グリッド、SB07内に位置する。1.9m×1.7m、深さ35cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はEを示す。覆土はSB07を参照。セクションによって、本址はSB07よりも新しいことがわかる。

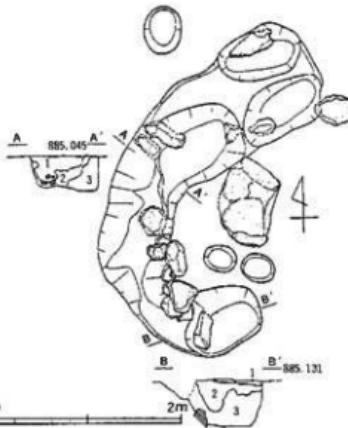
遺物 覆土上層中から土師器破片数片が出土

しており、平安時代の所産と思われる。

#### 4 溝状遺構(S D01、S D02)

##### SD01 (第44図)

遺構 P18グリッド、SB15の西側に位置する。全長5m、幅0.6~0.8m、深さ30~50cmを測り、U字形を呈す。覆土は次のとおり。1層 黒色土層ースコリア、ローム粒子、小礫を多く混入する。しまり、粘性共に強い。2層 茶褐色土層ーローム粒子を多く含み、粘性、しまり共にあり。小礫をやや多く含む。3層 黒褐色



第44図 SD01 (1/60)

土層—スコリア、白色砂粒  
をやや多く含み、しまり、  
粘性共に非常に強い。

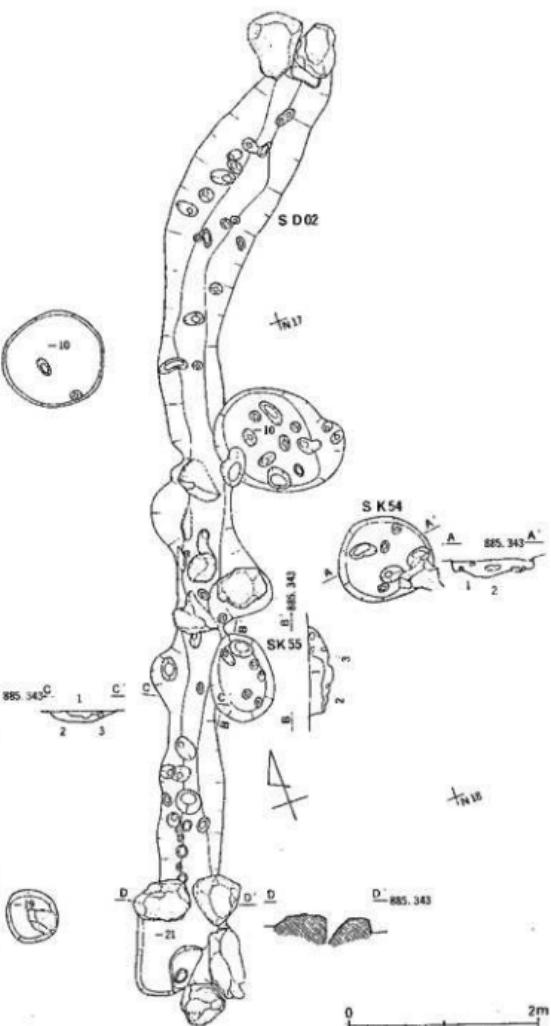
遺物 遺物はない。

SD02 (第45図、図版

6-2)

遺構 M・N16, M17・  
18に位置し、SK55、他 1  
基の上部と重複する。全長  
11.4 m、幅0.5~1.0 m、深  
さ12 cmを測り、北東から南  
西へほぼ直線的に走る。根  
上は次のとおり。1層 墓  
茶褐色土層—ローム粒子、  
スコリア等が混入し、粘性、  
しまり共にあり。2層 茶  
褐色土層—小礫を混入し、  
粘性、しまり共にあり。3  
層 黄褐色土層—礫を混入  
するローム上。溝中に小  
ビットが40本近くみられる。  
南端にはコの字状の石組が  
みられるが、人為的なもの  
か否かは不明である。また  
北端には、60~70cm人の石  
2個による配石がみられる。  
これらの配石は溝址の機能  
と強く結びついた遺構であ  
ろう。

遺物 遺物はない。

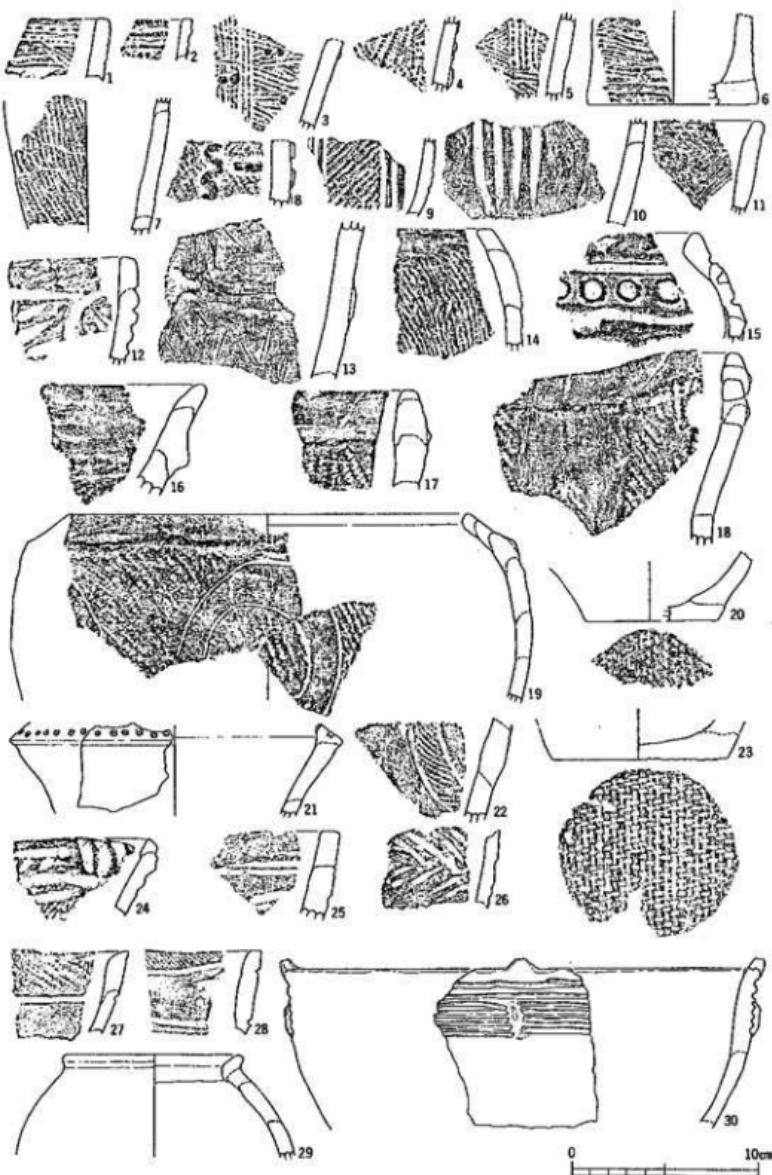


第45図 SD02, SK54, SK55 (1/60)

## 5 遺構外遺物

縄文土器 (第46、47図、図版10)

本遺跡からは、遺構に直接伴わない縄文土器片が約244片出土した。土器片は調査区全域から



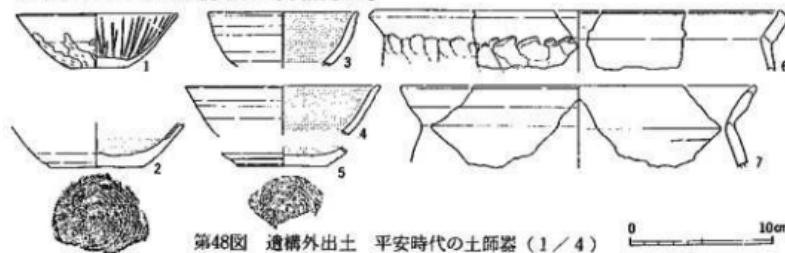
第46図 遺構外出土 繩文土器 (1/3)

出土をみたが、特に集中した箇所はない。1～6は縄文時代前期末葉の諸磯C式土器である。7～20は縄文時代中期の土器で、8は曾利II式土器、

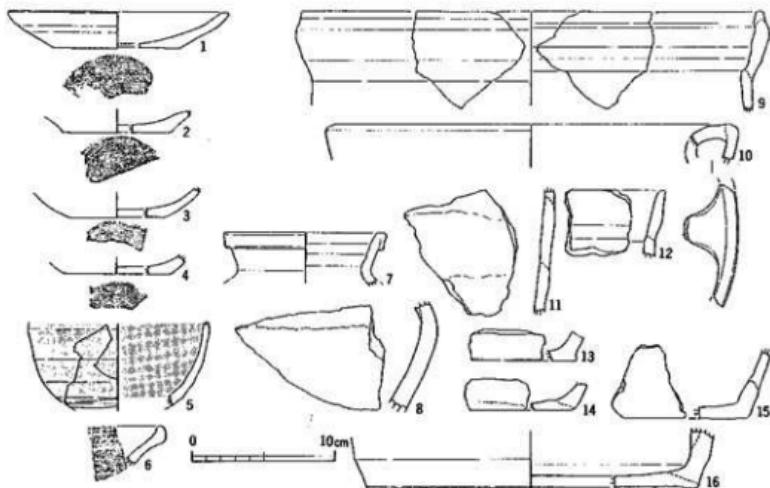


第47図 遺構外出土 縄文土器 (1/4)

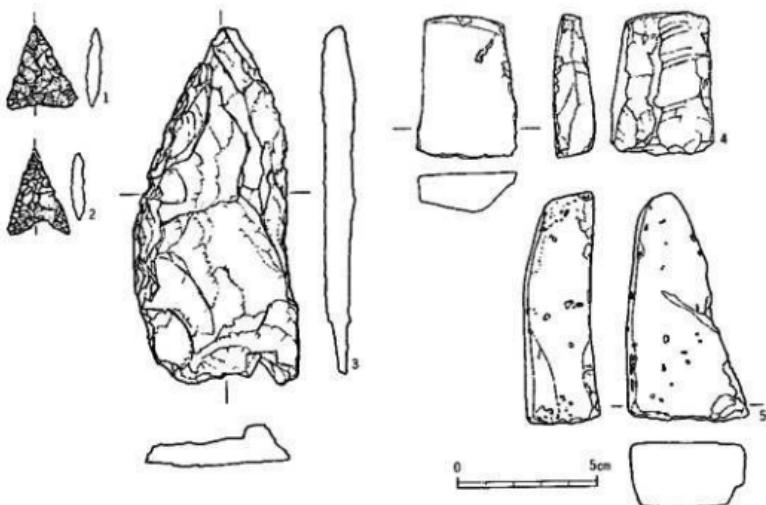
9、10は加曾利BIII式土器、13は曾利V式土器、16～19は断面三角形の微隆起が貼付された加曾利EIV式土器である。21～28は縄文時代後期の土器で、22は称名寺式土器、24は堀ノ内式土器、27、28は後期中葉以降の土器であろう。29は時期不明。30は縄文時代晚期、水I式併行の鉢形土器で、SB04の覆土中から出土した。



第48図 遺構外出土 平安時代の土師器 (1/4) 0 10cm



第49図 遺構外出土 土師質土器、内耳土器、陶器 (1/4)



第50図 遠横外出土 石器（1、2は1／1、3～5は1／2）

#### 平安時代の土師器

1～5は土師器壺である。1は内面に放射状の暗文をもつ甲斐型の土師器壺で、底径／口径比は35%である。6,7は土師器壺で、6は刺みのない籠による削りが胴部外面にみられ、他の該期の窯と比べて異質である。7はロクロ調整が施されている壺で、平安時代以降の可能性がある。

#### 中・近世の土師質土器、内耳土器、陶器（第49図）

1～4は土師質土器である。1は底径／口径比57%で、内面にスヌが付着し、灯明皿として使用されたと思われる。5～7は陶器類で、5は天目茶碗、6は拂鉢で、共に美濃窯であろう。7、8は常滑の壺である。この他にも染付等、若干の陶器片が出土している。9～16は内耳土器である。

#### 石器（第50図）

本遺跡からは、縄文時代から中・近世までの石器が数点出土した。1、2は縄文時代の黒曜石製の石器である。1、2とも0.5g以下で非常に軽量である。3はSB10のカマドの構築石に混じって出土した縄文時代のものと思われる横刃形打製石器である。粘板岩系の石質で、重さ89g。4、5は中・近世の砥石である。4は砂岩系の石材を用いた中砥で、3面を砥石面として利用している。重さ99g。5は粘板岩質の仕上げ砥で、淡黄色を呈す。1面のみを砥石面として利用している。重さ32g。

#### 中国錢（第39図、第1表）

本遺跡からは、SK13、SK63、SK65、SB12以外に、SB10付近を中心に8枚の中國錢が検出され、土壙出土品と合わせて計24枚を数える。このうち唐錢は開元通宝と乾元重宝の2

種2枚、宋銭は景德元宝、皇宋通宝、嘉祐通宝、治平元宝、熙寧元宝、元豐通宝、紹聖元宝、聖宋元宝の8種15枚、明銭は洪武通宝、永樂通宝の2種7枚である。本遺跡は、寛永通宝等の日本銭を含まないことに特徴があり、掘立柱建物址、墓壙を中心とする遺構群が、戦国時代以前の所産である可能性を示唆する。

## VI まとめ

東姥神B遺跡の調査によって、縄文時代から中、近世までの多数の遺構群を明らかにすることことができた。その中で、この遺跡の主体をなすのは8軒の堅穴住居址からなる平安時代の集落址である。大泉村では既に昭和54年以降、寺所遺跡(31軒)、城下遺跡(25軒)、原田遺跡(5軒)、金牛遺跡(6軒)、天神遺跡(3軒)、東原遺跡(13軒)、木の下・大坪遺跡(8軒)の、7遺跡から総計91軒の平安時代の堅穴住居址が検出されているが、今回の東姥神B遺跡の資料を加えるまでもなく、平安時代の堅穴住居址の軒数の多さに改めて驚かされる。一方、奈良時代となると、村内では現在までに10数件の発掘調査が行われているにもかかわらず、遺構どころか、1片の遺物すら発見されていない。また度重なる分布調査でも奈良時代の遺物は確認されたことはない。この現象を我々はどうに捉えたらよいのだろうか。素直に受けとめて解釈するならば、八ヶ岳南麓のこの地に、人々は平安時代になって入植したことになる。勿論大泉村に、平安時代以前には人間が全く住んでいなかった、ということではない。犬神遺跡、金生遺跡に代表されるように、縄文時代には継続してこの地域に大規模な集落が営まれていたという事実がある。何らかの理由で一時人々が去った後、再び平安時代に人々がやってきた。一体どのような社会的背景から、どんな直接的理由で、そして何処からどんな集団がこの地へやって来たのだろうか。そしてこの地でどんな暮らしが営まれたのだろう。

この全ての疑問に対して即答することは今のところできない。しかし、今回の調査の結果、数々の疑問に対するひとつの手がかりを得ることができた。それは、SB05から出土した「安曇」の墨書き土器である。この文字が甲斐型の壺に書かれていることで、甲斐国内の何処かで生産されたこの製品が、この東姥神の地に運ばれ使用されたことは明らかである。その文字が古代の豪族、安曇氏の「安曇」であることから、東姥神と安曇氏との間に何らかの関連があったことは想像に難くない。推論を許されるならば、安曇氏に関わる集団が、平安時代にこの地域に移住してきたのではないだろうか。

安曇氏は、筑前国糟屋郡阿雲郷より発祥し、早くより海人を支配し、その航海技術で東方への勢力を拡大したといわれる。その結果、安曇(長野県)、渥美(愛知県)、安積(福島県)等々、全国各地にその名を地名として残している。その中でも、長野県の安曇は、古代の信濃国におかれていいた安曇郡の名残りで、信濃国の北西部に位置し、地方に土着した安曇氏の大勢力圏であった。一方東部の佐久地方と安曇氏との結びつきを述べる研究者もあり、佐久地方に地理的に近いこの地域が、佐久地方を通して何らかの形で安曇郡と関わりをもっていたこと

が容易に想像できる。

そこで地名として「安曇」をみた場合、大泉村内には、安曇はもとよりそれに近い地名を見出すことはできない。ところが、隣接する高根町箕輪付近には「熱那」（又は「阿都那」）があり、「安曇」を「阿都三」とも書くことから、両者の間には深い関わりがありそうである。

以上の推論は、大泉村内だけで追求しても到底結論づけられるものではなく、広く長野県、特に佐久地方との造構、遺物の比較、検討が今後必要とされよう。

#### 引用、参考文献

- 桂川七郎 1936「地方豪族の興起と莊園の発生」『山梨県総合郷土研究』 山梨県師範学校、山梨県女子師範学校共編
- 後藤四郎ほか 1979「安曇氏」「安曇郡」「国史大辞典 第1巻」 吉川弘文館
- 山根弘人ほか 1981「山梨県大泉村 御所遺跡 一第2次発掘調査報告書」 山梨大学考古学研究会
- 服部敬史ほか 1981「南多摩古窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古 第12号』 神奈川考古同人会
- 新津 健ほか 1982「大泉村東原遺跡」『山梨考古 第7号』
- 田口昭二 1982「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル №211』
- 末木 健 1983「山梨県下の墨書き土器」『甲斐路 №49』 山梨郷土研究会
- 坂本美夫ほか 1983「神奈川考古 第14号 シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題 一相模国と周辺地域の様相一」 神奈川考古同人会
- 佐野勝広 1983「木の下・大坪遺跡」 光洋電子工業株式会社、山梨県大泉村教育委員会
- 1984「東姥神遺跡 県営圃場整備事業計画予定工区内発掘調査報告書」 大泉村教育委員会
- 百瀬長秀 1984「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学会誌 49』 長野県考古学会
- 雨宮正樹 1984「山梨県北巨摩郡高根町 東久保遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 高根町教育委員会

第1表 中 国 錢 一 覧 表

|    | 出土地点  | 錢貨名  | 時代 | 鋳造年代 |      | 備考     | 出土地点 | 錢貨名      | 時代   | 鋳造年代   |      | 備考   |
|----|-------|------|----|------|------|--------|------|----------|------|--------|------|------|
|    |       |      |    | 年代   | 西暦   |        |      |          |      | 年代     | 西暦   |      |
| 1  | SK 13 | 開元通宝 | 唐  | 武徳4年 | 621  |        | 13   | 元        | 元豐通宝 | 宋      | 元豐元年 | 1078 |
| 2  | "     | 熙寧元年 | 宋  | 熙寧元年 | 1068 |        | 14   | 聖宋元宝     | "    | 建中靖國元年 | 1101 |      |
| 3  | "     | 元豐通宝 | "  | 元豐元年 | 1078 |        | 15   | 洪武通宝     | 明    | 洪武元年   | 1368 |      |
| 4  | "     | 紹聖元寶 | "  | 紹聖元年 | 1094 |        | 16   | SB 12    | 元豐通宝 | 宋      | 元豐元年 | 1078 |
| 5  | "     | 永泰通宝 | 明  | 永泰6年 | 1408 |        | 17   | SB 10上 暫 | "    | "      | "    | "    |
| 6  | "     | "    | "  | "    | "    |        | 18   | "        | "    | "      | "    | "    |
| 7  | SK 63 | 皇宋通宝 | 宋  | 寶元2年 | 1039 |        | 19   | "        | 永泰通宝 | 明      | 永泰6年 | 1408 |
| 8  | "     | 紹聖元寶 | "  | 紹聖元年 | 1094 |        | 20   | "        | "    | "      | "    | "    |
| 9  | "     | 永泰通宝 | 明  | 永泰6年 | 1408 |        | 21   | U18ダリッド  | 乾元重宝 | 唐      | 乾元2年 | 758  |
| 10 | SK 65 | 嘉祐通宝 | 宋  | 嘉祐年間 | 1056 |        | 22   | "        | 景德元宝 | 宋      | 景德年間 | 1004 |
| 11 | "     | 治平元宝 | "  | 治平元年 | 1064 | 背面鉄壓すれ | 23   | "        | 乾宋通宝 | "      | 寶元2年 | 1039 |
| 12 | "     | 元豐通宝 | "  | 元豐元年 | 1078 |        | 24   | 表 摺      | 洪武通宝 | 明      | 洪武元年 | 1368 |

第2表 平安時代、中世の土器観察表

(法量は口径、底径、器高の順、一は計測不能、( ) は推定値)

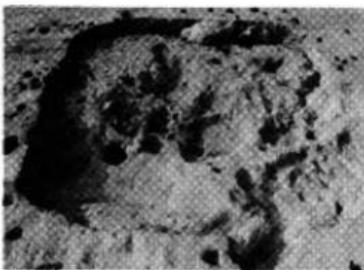
| 排番<br>番号 | 番号 | 器種          | 法量<br>cm             | 成・整形技法                              | 胎 土           | 残存<br>% | 備 考                  |
|----------|----|-------------|----------------------|-------------------------------------|---------------|---------|----------------------|
| 9        | 1  | 土師<br>高台付皿  | (12.3)<br>5.7<br>2.9 | 底部 糸切り後一部調整<br>付高台<br>内面 黒色処理       | 白・黒色砂粒        | 50      |                      |
|          | 2  | 土 壺         | 12.0<br>4.7<br>3.8   | 底部 同軸糸切りのまま<br>内面 黒色処理              | 白・黒色砂粒        | 80      | 外面2ヶ所に「平」<br>モミ庄痕1ヶ所 |
|          | 3  | 須恵<br>壺     | (13.8)<br>6.4<br>4.2 | 底部 同軸糸切りのまま                         | 白・黒色砂粒        | 30      | G59併行                |
|          | 4  | 土 壺         | 11.0<br>4.9<br>4.4   | 底部 糸切り後ヘラ削り<br>胴部外面以下ヘラ削り           | 白色砂粒少量        | 60      | 底部に「高」<br>外面スス(?)付着  |
|          | 5  | 土 壺         | (16.7)<br>—<br>—     | ロクロ成形                               | 白色砂粒          | —       |                      |
|          | 6  | 土 壺         | (25.0)<br>—<br>—     | 口縁外面 ロクロ調整<br>胴部外面 縦刷毛目<br>内面 斜め刷毛目 | 金雲母・白色砂粒      | —       | 内面口縁～胴部スス(?)付着       |
|          | 7  | 土 壺         | (9.0)<br>—<br>—      | 底部 木葉痕<br>胴部内面 橋刷毛目<br>底内面 ヘラ削り     | 金雲母<br>白色砂粒   | —       |                      |
|          | 8  | 土 壺         | —<br>(9.0)           | 胴部外面 縦ヘラ削り<br>内面 指頭に痕<br>底内面 ヘラ削り   | 金雲母<br>白色砂粒   | —       | 内面胴部スス(?)付着          |
| 15       | 1  | 土 壺         | (14.0)<br>—<br>—     | 内・外面 黒色処理                           | 白色砂粒          | 5       |                      |
|          | 2  | 土 壺         | (32.5)<br>—<br>—     | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 斜め刷毛目               | 金雲母<br>白・黒色砂粒 | —       |                      |
| 17       | 1  | 土 壺         | (14.6)<br>—<br>—     |                                     | 白・黒色砂粒        | 10      |                      |
|          | 2  | 土 壺         | (13.0)<br>—<br>—     | 胴部外面以下ヘラ削り                          | 白・黒色砂粒        | 20      |                      |
|          | 3  | 土 壺         | 12.1<br>4.1<br>4.3   | 底部 糸切り後一部ヘラ削り<br>胴部外面以下ヘラ削り         | 白色砂粒          | 70      | 暗褐色                  |
|          | 4  | 土 壺         | 12.6<br>4.8<br>2.7   | 底部 ヘラ削り<br>胴部外面以下ヘラ削り               | 白色砂粒          | 80      | 内面スス(?)付             |
|          | 5  | 灰 軸<br>高台付皿 | 16.0<br>8.5<br>5.1   | 灰軸刷毛塗り                              | 白色砂粒          | 40      | 光ヶ丘1号窯式              |
|          | 6  | 灰 軸<br>高台付皿 | 14.5<br>7.0<br>3.3   | 灰軸つけがけ                              | 白色砂粒微量        | 100     | 大原2号窯式<br>(古)        |
|          | 7  | 土 壺         | (27.5)<br>9.4<br>—   | 底部木葉痕、内面刷毛目<br>胴部・外面縦刷毛目<br>内面斜め刷毛目 | 白色砂粒少量        | 20      |                      |

| 標 国<br>番 号 | 番 号 | 器 種         | 法 尺<br>cm              | 成・整 形 技 法                             | 胎 上           | 残 存<br>% | 備 考                |
|------------|-----|-------------|------------------------|---------------------------------------|---------------|----------|--------------------|
| 20         | 1   | 上 鍋<br>蓋    | 17.0<br>—<br>4.0       | 底部 ハラ削り<br>—<br>—                     | 白色砂粒微量        | 40       |                    |
|            | 2   | 上 鍋<br>环    | (10.8)<br>4.8<br>4.0   | 底部 ハラ削り<br>胸部外面1/2以下 ハラ削り<br>内面 放射状暗文 | 白色砂粒微量        | 40       | 底部に「安恐」            |
|            | 3   | 上 鍋<br>蓋    | (25.7)<br>—<br>—       | 胴部 縦刷毛目<br>内面 橫刷毛目                    | 金雲母<br>白色砂粒微量 | —        |                    |
|            | 4   | 土 鍋<br>壳    | —<br>(8.2)             | 底部木葉痕、内面刷毛目<br>胸部外面縦刷毛目<br>内面縦め刷毛目    | 金雲母<br>白黒色砂粒  | —        |                    |
|            | 5   | 土 鍋<br>壳    | (27.2)<br>—<br>—       | 口縁部内、外面刷毛目<br>胸部外面縦刷毛目<br>内面 橫刷毛目     | 白色粒子少量        | —        |                    |
| 22         | 1   | 灰 軸<br>高台付塊 | —<br>7.0               | 底部 回転条切り後ナデ<br>調整                     | 白色砂粒少量        | —        | 転用硯の可能<br>性あり      |
|            | 2   | 土 鍋<br>壳    | (22.4)<br>—<br>—       | 外面 斜め刷毛目<br>内面 橫刷毛目                   | 金雲母<br>白色砂粒   | —        |                    |
| 23         | 1   | 土 鍋<br>环    | (12.6)<br>—<br>—       | 内面 黒色處理                               | 白色砂粒          | —        |                    |
|            | 2   | 土 鍋<br>壳    | (21.0)<br>—<br>—       | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 斜め刷毛目                 | 金雲母<br>白黒色砂粒  | —        |                    |
|            | 3   | 上 鍋<br>蓋    | (21.8)<br>—<br>—       | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 ナデ調整                  | 金雲母<br>白色砂粒   | —        | 内面口縁～胴<br>部スス(?)付着 |
|            | 4   | 上 鍋<br>壳    | —<br>9.5               | 底部木葉痕、内面ハラ削<br>り、胸部外面横刷毛目<br>内面横刷毛目   | 白色砂粒          | —        |                    |
|            | 5   | 上 鍋<br>蓋    | (26.6)<br>—<br>—       | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 橫刷毛目                  | 金雲母<br>白色砂粒   | —        | 内面口縁～胴<br>部スス(?)付着 |
|            | 6   | 土 鍋<br>壳    | (27.8)<br>—<br>—       | 胴部外面縦刷毛目<br>内面 斜め刷毛目                  | 金雲母<br>白色粒子   | —        | 口縁内外面ス<br>ス(?)付着   |
|            | 7   | 土 鍋<br>壳    | (33.0)<br>—<br>—       | 胴部外面 刷毛目<br>内面 指頭直抜、ナデ調整              | 金雲母<br>白・黒色粒子 | —        |                    |
|            | 8   | 土 鍋<br>壳    | (8.2)<br>—<br>—        | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 斜め刷毛目                 | 金雲母<br>白・黒色砂粒 | —        | 内面炭化物付<br>着        |
|            | 9   | 土 鍋<br>壳    | —<br>(7.6)             | ロクロ成形、底部条切り<br>のまま                    | 白色砂粒          | —        |                    |
| 26         | 1   | 上 鍋<br>环    | (14.4)<br>(5.5)<br>4.6 | 底部 ハラ削り<br>胸部外面1/2以下 ハラ削り<br>内面 黒色處理  | 白色砂粒          | 30       |                    |
|            | 2   | 灰 軸<br>高台付塊 | (15.6)<br>7.1<br>4.7   | 底部 回転条切り後一部<br>ナデ調整、灰軸つけがけ            | 白色砂粒微量        | 50       | 大原2号窯式<br>(古)      |
|            | 3   | 上 鍋<br>小型 蓋 | (7.9)<br>—<br>—        | 胴部外面 縦刷毛目                             | 金雲母<br>白色砂粒   | —        |                    |
|            | 4   | 上 鍋<br>壳    | (12.3)<br>—<br>—       | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 ナデ調整                  | 金雲母<br>白色砂粒   | —        | 内外面スス付<br>着        |
|            | 5   | 上 鍋<br>壳    | (18.2)<br>—<br>—       | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 橫刷毛目                  | 金雲母<br>白色粒子   | —        | 外側胴部スス<br>(?)付着    |

| 桿番号 | 番号 | 器種   | 法量<br>cm                 | 成・整形技法                                  | 胎土                        | 残存<br>% | 備考           |
|-----|----|------|--------------------------|---|---------------------------|---------|--------------|
|     | 6  | 土師甕  | (30.0)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 横刷毛目                    | 金雲母<br>白・黒色砂粒             | —       |              |
|     | 7  | 土師蓋  | (24.5)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 横刷毛目                    | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
| 28  | 1  | 土師壺  | (12.5)<br>—<br>—         | 内・外面口縁部 黒色処理                            | 白色砂粒少量                    | —       |              |
|     | 2  | 土師壺  | (12.9)<br>—<br>—         |   | 白色砂粒微量                    | —       |              |
|     | 3  | 土師壺  | (11.3)<br>—<br>—         | 胴部 ヘラ削り                                 | 白色砂粒                      | —       |              |
|     | 4  | 土師壺  | 13.8<br>4.3<br>4.4       | 底部 素切後底面へラ削り<br>胴部外面 1/2ヘラ削り<br>内面 黒色処理 | 白色砂粒<br>スコリア              | 70      | 胴部外面1春       |
|     | 5  | 土師甕  | (20.7)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 横刷毛目                    | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
|     | 6  | 土師甕  | (26.7)<br>—<br>—         | 胴部内面 斜め刷毛目                              | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
|     | 7  | 土師甕  | (26.8)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 ナデ調整                    | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
|     | 8  | 土師甕  | (14.7)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 横刷毛目                    | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
|     | 9  | 灰釉碗  | (15.4)<br>—<br>—         | 灰釉刷毛削り                                  |                           | —       |              |
| 37  | 1  | 土師甕  | (18.1)<br>—<br>—         | 胴部外面 縦刷毛目<br>内面 横刷毛目                    | 金雲母<br>白色砂粒               | —       |              |
|     | 2  | 上師質皿 | 7.7<br>4.1<br>1.8        | 回転糸切りのまま                                | 金雲母、白・黒<br>色砂粒、スコリ<br>ア微量 | 100     | 内面スス(?)付着    |
|     | 3  | 上師質皿 | (6.8)                    | 回転糸切りのまま                                | 金雲母、白・黒<br>色砂粒、スコリ<br>ア微量 | —       |              |
|     | 4  | 土師質皿 | (7.4)                    | 回転糸切りのまま                                | 金雲母、白・黒<br>色砂粒、スコリ<br>ア微量 | —       |              |
|     | 5  | 上師質皿 | (11.9)<br>(7.9)<br>(2.8) | 回転糸切りのまま                                | 金雲母、白・黒<br>色砂粒、スコリ<br>ア微量 | 40      | 内面スス(?)付着    |
|     | 6  | 土師質皿 | (26.5)<br>—<br>—         | 回転糸切りのまま                                | 白色砂粒<br>石英粒子少量            | 30      | 須恵質に近い<br>焼成 |
|     | 7  | 内耳土器 | (26.5)<br>—              | ロクロ整形                                   | 白色砂粒                      | —       | 外面スス付着       |
|     | 8  | 内耳土器 | —                        | ロクロ整形                                   | 白・黒色砂粒<br>スコリア、石英         | —       | 外面スス付着       |
| 48  | 1  | 土師壺  | (11.3)<br>4.0<br>3.8     | 底部 ヘラ削り<br>胴部外面 1/2以下ヘラ削り<br>内面 放射状暗文   | 白色砂粒                      | 30      |              |
|     | 2  | 土師壺  | 6.5<br>—                 | 底部 回転糸切りのまま<br>内面 黒色処理                  | 黒雲母<br>白・黒色砂粒             | —       |              |

| 博 国<br>番 号 | 番 号 | 器 種        | 法 量<br>cm              | 成・整 形 技 法              | 胎 土                       | 残 存<br>% | 備 考        |
|------------|-----|------------|------------------------|------------------------|---------------------------|----------|------------|
|            | 3   | 土 師<br>坏   | (10.2)<br>—<br>—       | 内面 黑色處理                | 黒雲母<br>白・黑色砂粒             | —        |            |
|            | 4   | 土 師<br>坏   | (13.3)<br>—<br>—       | 内面 黑色處理                | スコリア、黑色<br>砂粒微量           | —        |            |
|            | 5   | 土 師<br>坏   | (6.2)                  | 底部 回転糸切りのまま<br>内面 黑色處理 | 黒雲母<br>白色砂粒               | —        |            |
|            | 6   | 土 師<br>壺   | (28.5)<br>—<br>—       | 外面 ヘラ削り<br>内面 ナヂ調整     | 金雲母、<br>白色砂粒              | —        |            |
|            | 7   | 土 師<br>壺   | (24.8)<br>—<br>—       | ロクロ調整                  | 金雲母、スコリ<br>ア、白・黑色砂<br>粒微量 | —        |            |
| 49         | 1   | 土 師 質<br>皿 | (15.5)<br>(8.9)<br>2.6 | 底部 回転糸切りのまま            | 金雲母、<br>白色砂粒微量            | 30       |            |
|            | 2   | 土 師 質<br>皿 | (7.6)                  | 底部 静止糸切りのまま            | 白・黑色砂粒<br>スコリア            | —        |            |
|            | 3   | 土 師 質<br>皿 | (6.6)                  | 底部 回転糸切りのまま            | 金雲母、<br>白色砂粒              | —        |            |
|            | 4   | 土 師 質<br>皿 | (7.5)                  | 底部 回転糸切りのまま            | 白色砂粒、スコ<br>リア微量           | —        |            |
|            | 5   | 天目茶碗       | —                      | 鉄軸+天目釉                 |                           | —        |            |
|            | 6   | 美濃 (?) 鉢   | —                      | 鉄 軸                    | 白色砂粒                      | —        |            |
|            | 7   | 常 清<br>壺   | (11.0)<br>—<br>—       |                        | 白色砂粒                      | —        |            |
|            | 8   | 常 大<br>清 壺 | —<br>—<br>—            |                        | 白色砂粒                      | —        | 内面漆 (?) 付着 |
|            | 9   | 内耳土器       | (32.5)<br>—<br>—       | ロクロ調整                  | 白・黑色砂粒                    | —        |            |
|            | 10  | 内耳土器       | (27.5)<br>—<br>—       | ロクロ調整                  | 白色砂粒、スコ<br>リア             | —        |            |
|            | 11  | 内耳土器       | —<br>—                 | 胸部内外面 ナヂ調整             | 白・黑色砂粒                    | —        | 外面スヌ付着     |
|            | 12  | 内耳土器       | —<br>—                 | ロクロ調整                  | 白・黑色砂粒                    | —        | 外面スヌ付着     |
|            | 13  | 内耳土器       | —<br>—                 | ロクロ調整                  | 白・黑色砂粒                    | —        |            |
|            | 14  | 内耳土器       | —<br>—                 |                        | 白・黑色砂粒                    | —        |            |
|            | 15  | 内耳土器       | —<br>—                 |                        |                           | —        |            |
|            | 16  | 内耳土器       | (23.3)<br>—            | ロクロ調整                  | 白・黑色砂粒                    | —        |            |

図版 1



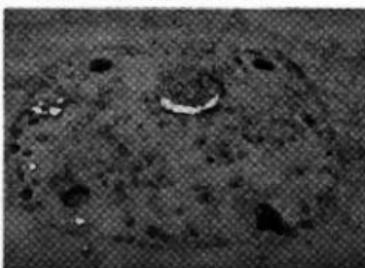
1 SB01(南から)



2 SB01遺物出土状況(東から)



3 SB01鉄溝出土状況(西南コーナー)



4 SB02(南から)



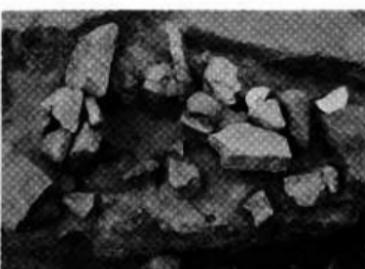
5 SB03, SB08(西から)



6 SB03カマド

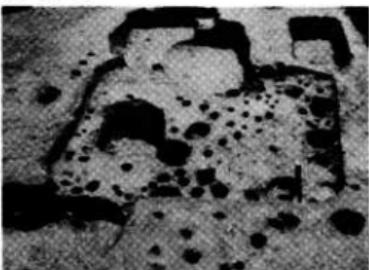


7 SB04(西から)



8 SB04カマド付近遺物出土状況

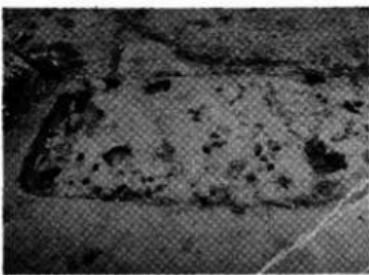
図版 2



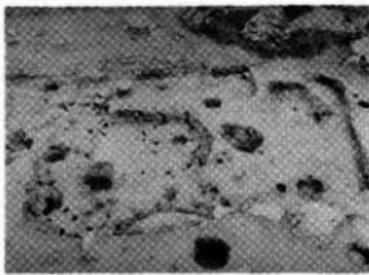
1 SB05 (西から)



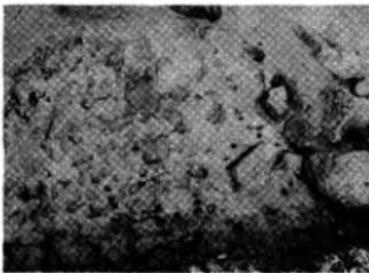
2 SB06, SB07 (西から)



3 SB06 (北から)



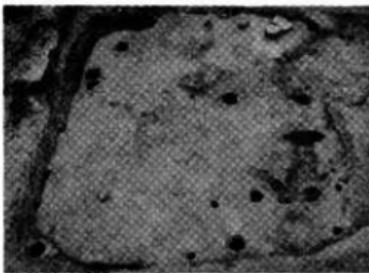
4 SB07 (北から)



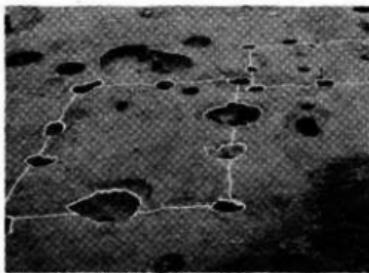
5 SB09 (西から)



6 SB09遺物出土状況 (東から)

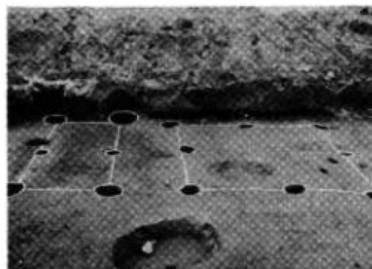


7 SB10 (西から)



8 SB11, SB12, SB20 (南から)

図版 3



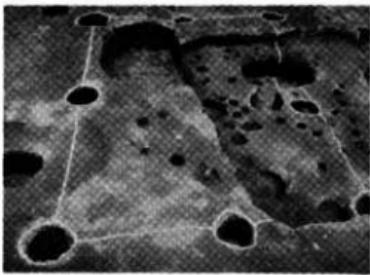
1 SB13, SB14 (北から)



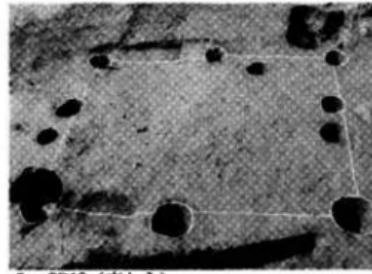
2 SB15 (南から)



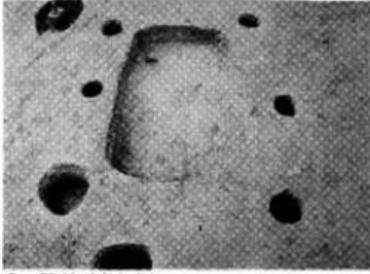
3 SB16 (北から)



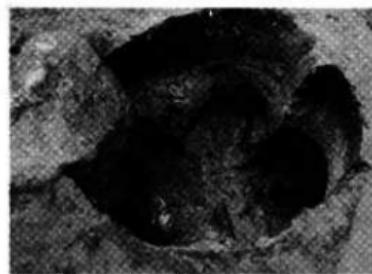
4 SB17 (南から)



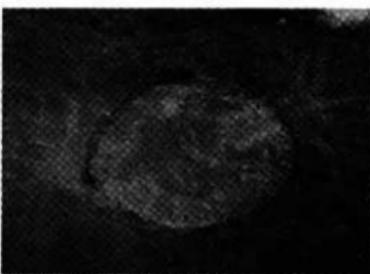
5 SB18 (南から)



6 SB19 (南から)



7 SK02 (北から)



8 SK02確認面 (南から)

図版 4



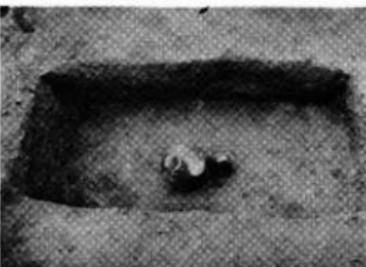
1 SK03閉塞石の出土状況（南から）



2 SK03, SK13 (南から)



3 SK06 (南から)



4 SK07 (南から)



5 SK07遺物出土状況（北から）



6 SK08集石上面 (南から)



7 SK08集石半截状況 (南から)



8 SK08 (南から)

図版 5



1 SK10, SK11発掘途中（西から）



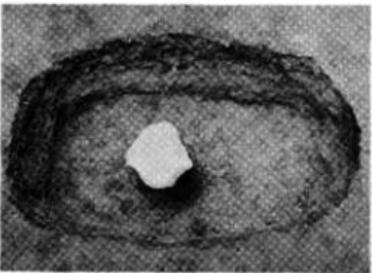
2 SK10, SK11（南から）



3 SK13配石状況（南から）



4 SK13中国錢出土状況



5 SK16（北から）



6 SK24（南から）



7 SK37石器出土状況（西から）



8 SK38配石状況（南から）

図版 6



1 SK45, SK46, SK47 (東から )



2 SK54, SK55, SD02 (南から )



3 SK56 (東から )



4 SK63人骨上部配石状況 (西から )



5 SK63人骨出土状況 (西から )



6 SK63頭骨

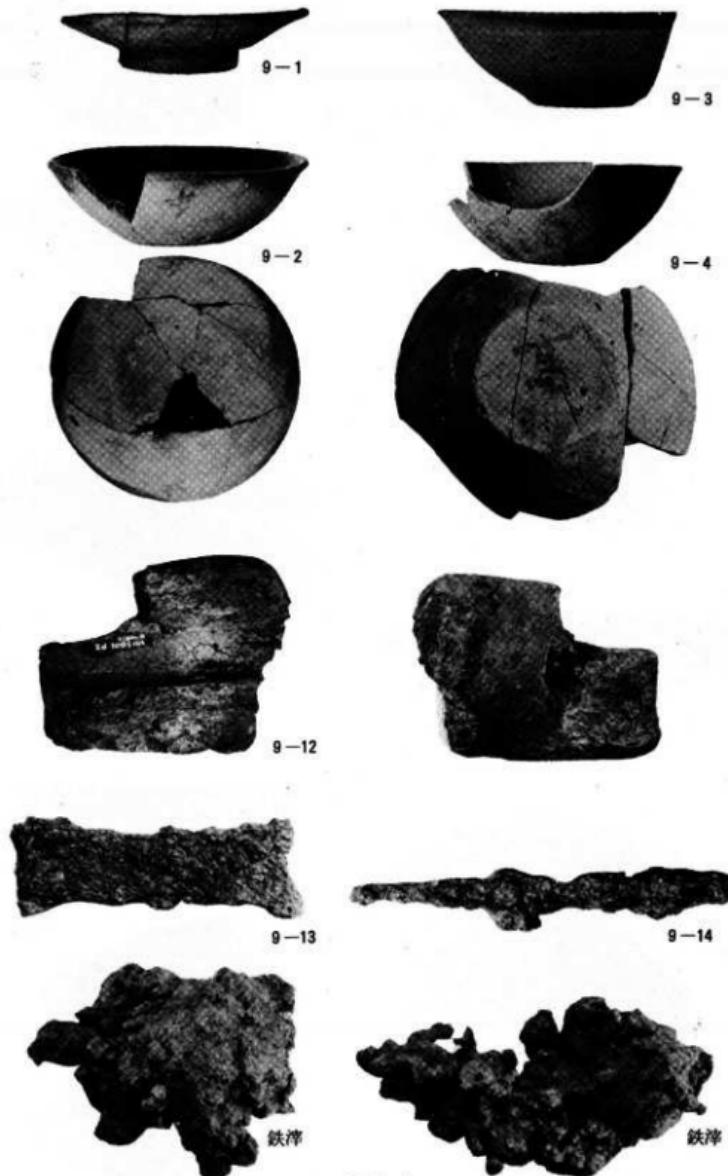


7 SK63中国錢出土状況



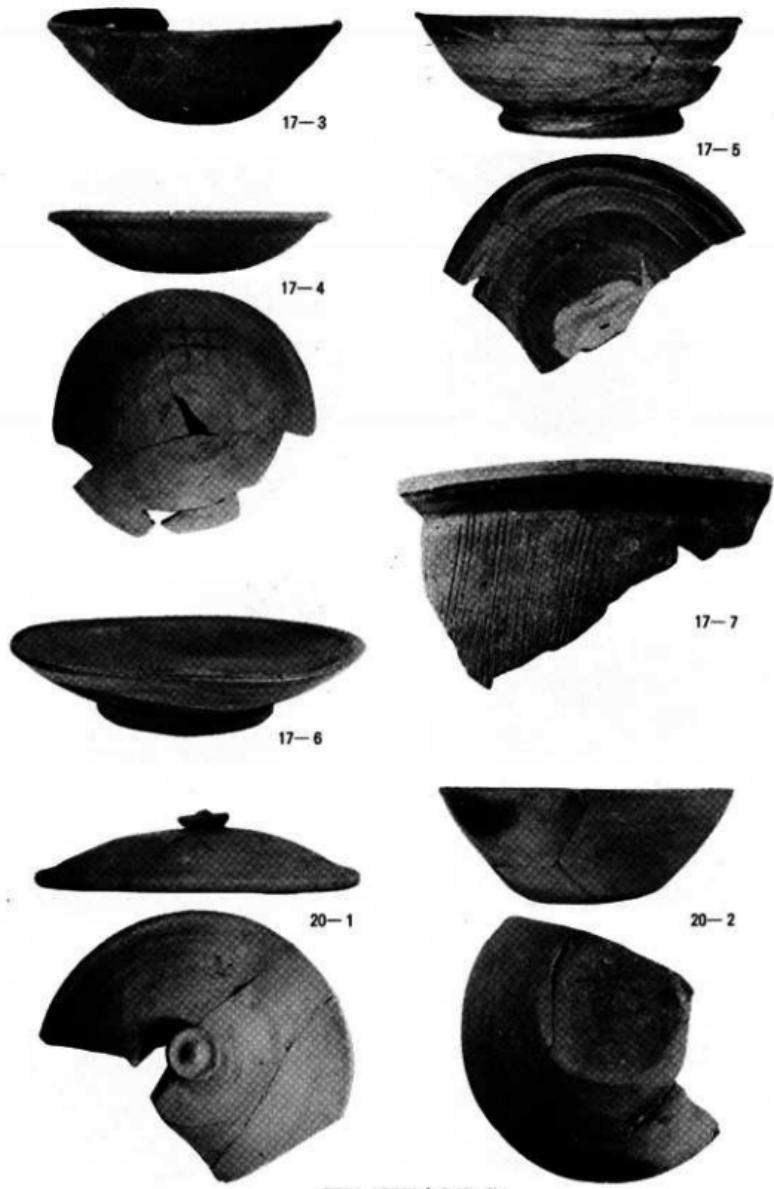
8 SK65頭骨, 中国錢出土状況 (西から )

図版 7



SB01出土遺物

図版 8



SB04, SB05出土遺物

図版 9



23-6



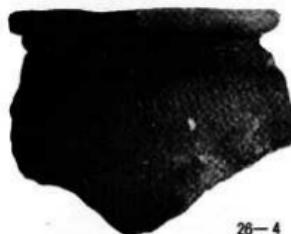
23-7



26-2



26-7



26-4



28-7



28-4



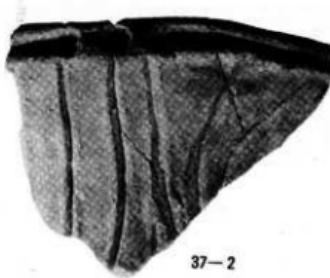
28-8

SB07, SB09, SB10出土遺物

図 版 10



37-1



37-2



46-19



46-23



46-27

1 繩文土器



46-30



2 遺跡中央部調査前（南から）



3 八幡神社南側調査後

四 版 11



## 1 SB01調査風景（北から）



## 2 SB05付近調査風景（北から）



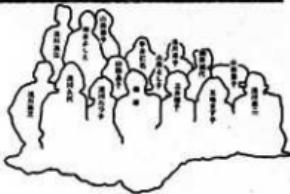
### 3 SB05付近調査風景（東から）



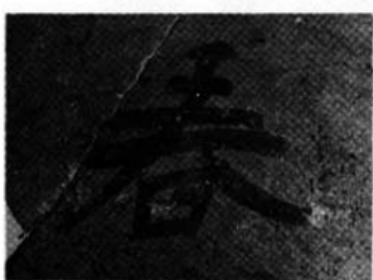
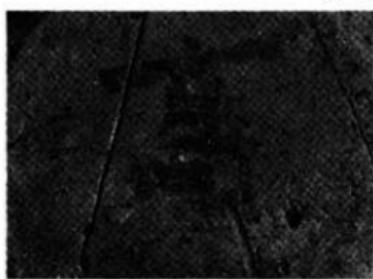
#### 4 遺跡東地区調査後（北から）



## 5 発掘調査参加者の皆さん



図版 12



墨書文字集成

昭和60年3月31日発行

大泉村埋蔵文化財調査報告第3集

**東姥神B遺跡**

編集 大泉村教育委員会  
発行

〒409-15

山梨県北巨摩郡大泉村西井出3193

大泉村総合会館内

TEL 0551-38-3115

印刷 島北印刷株式会社

〒409-15

山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条

TEL 0551-32-3245

